



第 17 号
1971. 10

- 5 <無知の涙=永山則夫獄中ノート>によせて
貧困と幻想
福岡 信孝
- 12 ルイ・アルチュセール<甦るマルクス>
人間主義の徹底的否定
渡辺 幸博
- 19 大正期における近代化の意味
共同性と天皇制
米村 喜久男
- 28 K・コルシュ
革命スペインの経済と政治
スペインでの集産化
野村 修 訳
- 26 古代史の謎に挑む
埋葬遺構の発掘調査
網干 善 教
- 2 巻頭言 主体と歴史
- 42 編集後記

書

評

編 集・発 行
関西大学生協同組合
組 織 部
「書評」編集委員会

吹田市千里山17
TEL 388-1121
内 線 7 7 6

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

〔A〕 △沖繩▽△三里塚▽△中国▽△軍国主義▽△自衛隊Ⅱ軍隊▽△爆破▽△テロ▽△暴動▽△経済戦争▽△都市▽△コミュニティ▽△公害▽△回帰▽△怨念▽△闇▽△脱▽△反文明▽△ロック▽△ウィマンリブ▽△性▽

これらは時代のことばである。それが一つの記号―サイン―と化しており、それらに見合った反応が予期されている危険性がひそんでいる。しかし、それぞれのことばは地下茎のように脈絡をもっている。異質な要素から転回への蠢動、噴出である。これは主体としての意識、行動の表現である。

この転回力は、二十世紀の構造の矛盾の本質にせまり、可変する質へ成熟している。

〔B〕 レーニン、トロツキーにみられる第三インターナショナルの世界革命の展望は、西方の△原理▽と東方の△原理▽の組織的結合、それが矛盾を正しく止揚する現実力の生成であった。ヨーロッパの危機の状況に立脚した帝国主義時代の世界革命であり、ロシア革命を起点として、西方への、東方への永続的革命的展開による展望であった。

この第三インターナショナルの展望は流産、敗北した。革命ロシアは一九二五年以降とりわけ三〇年代とともに工業化を過渡期的社会主義国家の途上とし、國家官僚による暗黒な、中世カトリック教会的な専制・警察体制の確立である。これは革命の根拠地―ロシアの暗殺、抹殺であった。プロレタリア独裁の権力・政治思想を埋葬させ、スターリニズムの確立であった。

このように第三インターナショナルの敗北は、墮落した労働者國家ソ連邦を産みだすにとどまっただけではなく、東方(アジア)の革命への起点、第二次中国革命をも流産、敗北させた。

このことによつて、天皇制日本のアジア侵略△大東亜共栄圏▽の野望は、アジアの革命に対抗する帝国主義的冒険であった。

西方(ヨーロッパ)、東方(アジア)の革命の敗北によるプロレタリアートは、第二次世界大戦のつばの中へ投じられた。政治的成熟をおしとどめられたのである。

〔「日本人の中国認識は、戦前と戦後とで変わってない。日本人の思想なり、心理なりが全体として戦前と戦後とでは変わってないこととあらわれである」竹内好「日本とアジア」―日本人の中国観。(筑摩書房) 民主主義は仮象であった。戦後日本の国の支配思想、社会構造に基底からの変革は起こっていなかった。いや一層帝国主義的発展へ整備、強化されたというべきであろう。これは△沖繩▽と向き会うことによつて明らかになりつつある。〕

以上のように、ねじまげられ、はきみうちされた革命的左翼の展望した世界革命の喪失行程は、世界史の現実である。今日、この世界の構造と諸条件が可変可能なものへ転回している。中国革命、ベトナム革命戦争は、まさにアジアの革命へとせまらう。歴史の弁証法的な転回力といえる。

この△現代▽の構造を、イギリスの中世の歴史家、G・バラクラフはその著書「現代史序説」(岩波書店)で、次のように分析、展望している。(一)「今日の脅威は新

主体と歴史

巻頭言

資本主義制度の内的矛盾から起る国内の対立である」(ii)「階級闘争という古典的パターン、すべての者に豊富を約束する新しい工業社会が永久に追放したと自称している階級闘争が、今や国内社会ではなく、国境を越えてふたたび自己を再主張しつつある」(iii)「全世界の規模の国際的階級闘争」(iv)「新しい段階の終着点ではなく、開始点に立っている」と。歴史家のしたたかさと透視力である。

〔C〕 「伝えようとしてついに伝えおせぬこと——これが、人間のことばの全行程ではないか」内村剛介(文芸)。

スターリンラーゲリへの流刑、生棲をしいられた氏の個有の経験からの、△ことば▽の重さ、深さ、矛盾性に儼然とせざるをえない。更に、語りえぬものと語られることばの六間地獄の相点での修羅の姿内村剛介氏の営為に。

抽象的世界へ流れる△ことば▽。無制限に自転する△ことば▽。この△ことば▽の△主体▽を問わなければならない。語る意識の現存性が語られるべき内容として。

〔D〕 人間にとって本源的な語る行為の発生、生成をとらえる言語ならざるものに接するとき、語ることへ表出する。

そうであるなら、果して日本の民族は個々の生活感覚、次元で他民族との接触、交渉をもちえる思想性を問う地平を切拓けたであろうか。

飯塚の戦後民主主義は、自発的政治性をとらえた実践的意識の組織化に失敗しているのではなかったろうか。

それが、知識人の陥穽ではなかったろうか。



貧困と幻想

△無知の涙△永山則夫獄中ノート▽によせて

福岡 信孝

「嗚呼、師マルクスが『哲学の貧困』の末端で、ジョルジュ・サンドの『戦い』からずんば死か、血争どろの闘争か然らずんば無』との言葉の意味を誰か馬鹿正直なくらい真面目に受けて、その意義

ある行動を興さぬものか……。現在の学生諸君は理性(Logos)があり過ぎる」と私は思う、誰かこの気持判らるるか……。』と、書かているのを読んだ時、私は思わず錯覚をおこしました、こ

の獄中ノートは本当に永山則夫が書いたのかと、極貧で小学校、中学校と新聞配達をしながらのまず食わずの生活を余儀なくされた彼に、どうしてこれほどの文章が書けるようになり、このように言うことができるようになるのか不可解であったからです。獄中の文章はしっかりとしましたものです。およそ、これが全く意味なき四人の殺人をした連続射殺魔永山則夫の書いたものとは信じられないほどです。一体、何が彼をこうさせたのでしょうか？ これは重要な問題です。

永山則夫の生い立ちを知った時、私達

の多くは彼に同情を寄せたくなるかも知れませんが、しかし、彼は同情を拒否しました。何故でしょうか。私達を知るべきは彼を殺人へとかりたてた何か、根源的な暴力の本質であるからなのです。人間にとって暴力とは何かをです。この獄中ノートはそれを私達に訴えているように私は思われます。

暴力論争はこの間の全共闘運動の中で最も多くなされて来ました。関大闘争においても当初、やはりゲバ本をめぐっての暴力論争がありました。しかし、これらの多くは現象的な暴力についてであり、その核を出ないものでした。全共闘が武装し暴力を公然と行使した時、全共闘の暴力が目的意識的な自己を解放するための表現としての暴力であることを一切理解できず、多くの教師達はもつともらしい飯を食って暴力を否定しました。今まで大学の自治等という問題を考えてみたこともない一般学生と称する多くの者達も暴力を否定しました。暴力を否定するところがあたかも民主的であるかのようになっています。『全共闘の言うことは理解

生活をすることも、人間らしくあつかわれたこともなかつたのです。彼には何もありません。将来の夢も、希望も、知識も、親の愛情も、兄弟愛も、そして失うもの、さえもないのです。ただ生きているだけなのです。といって、私は永山則夫を正当化しようというわけではありません。彼は事実として何の意味もなく四人の人間を殺した殺人犯です。私がここで聞きたいのはこの射殺魔を一体、誰が殺すことができるのだろうか。ということことです。彼の暴力とは何だったのかということです。彼は物心ついてからおおよそ人間らしくあつかわれたことがありませんでした。彼にとって親や兄弟は、名前だけで何の意味も、何の関係もないのです。彼はある日殺人をしました。でも殺人は彼にとって意味はなかつたのです。何もしないと同じように。殺そうと殺すまいと何も変りはないのです。ただ生きているだけの生活、それだけの生の営みは、しだいに潜在的に蓄積された抑圧への反発を呼び戻し、殺人への暴力へと形成され爆

できる。だが、暴力はだめだ」というのでした。暴力によって全共闘の正しさが初めて主張されたことを無に帰しているのです。一体、暴力とは何であるのでしょうか。何を暴力というのでしょうか。

世界人権宣言は暴政への抵抗権として革命権を認めています。これは暴力の行使を正当な権利と認めていることにならなideしでしょうか。人間が人間として生きることを不当に阻害されている時、例え、それが時の政治権力によって合法とされていても、抵抗権としての暴力を行使することは正当であるべきです。人間には人間として生きたる権利があるからです。しかし、現実の社会はどうでしょうか。人間の生物としての限界をまで崩した公害という名の企業私害がはびこっています。私達はこれを見えない暴力に抵抗を行使すべきではないでしょうか。永山則夫を殺人へとかりたてた何かがあるにもあるように私は思えます。

永山則夫、昭和四十二年六月北海道網走に生れる。父武四、母ヨシの第七子。父はリング習正職人だったが、賭博癖が昂じて極貧に耐えきれず故郷青森県板柳

殺したといつたら過言でしょうか。彼を殺人へとかりたてた何かの中には、この無意識の抑圧への反発が必ずあつたと思わずにはいられません。事実として、このことは彼の獄中ノートから十分知ることができます。それは後で引用すると獄中ノートを読んで私が驚かされたこと、それは現在の彼の生活態度です。四人の人間を殺した永山則夫はA級の殺人犯であり確実に死刑です。無意味な殺人であるだけに弁論の余地はないのです。殺人者の多くは罪の報いのためか、自れの死への恐怖からか残された生を宗教に、信仰の道に救いを求めるものです。限定された生を送る独房は重々しく、冷たく、厳しい沈黙を強制される世界です。八注、筆者も目下六九年反闘争です。に一年有余独房拘禁の身たかなおさらよく判ります。Vその中でやがてめぐってくる絞首台にがある日を待つ毎日、およそ想像を絶した強壮と恐怖の連続ではないに若さです。でありながら彼は頑なに宗教への信仰の道を拒否しつづけてい

町に乳香子の四女と子守役の次女を伴つて戻る。この直後行方不明、則夫はか四名取残される。梅寒の網走に疎された則夫たちはナマのうごんを分けあって食べ、飢えをしのごく、ある日長女が飯場へ食物をもらいに行き輪急され発狂する。長女精神病院へ、昭和三十三年三月、福祉事務所の計いで青森の母の元に移される。小学校・中学校を極貧の中で新聞配達をしながら卒業、昭和四十年中学卒業とともに上京、就職、以後七回以上も転職する。これが連続射殺魔永山則夫の生い立ちの歴史です。彼の生れ育った環境はあまりに貧しく悲惨です。全く無責任な親、一片の愛情もない社会、彼の辺りは何もかも貧しく無知でした。そんな中で彼もまた無知でした。生れてきたのが間違いだといえはそれまでです。ですが、これは日本の現実なのです。これを私達は忖えてはなりません。GNP世界で二位、未だに夜間中学が存在していることもと裏として私達は認識すべきです。永山則夫は生れてから一度も間違った

るのです。今、彼は『資本記』を読み、『貧乏物語』を読み、ドストエフスキを読めて毎日の多くを過しているのです。何が彼をこうさせたのかは不明です。しかし、彼は確実に、どこまでも自分のような貧乏な人間がこの社会に存在するのやを識りはじめたのです。第十一回公判で彼は次のように裁判長に言っています。

「あなた、悔みたいな男をどう思う？」
「四人も人を殺し、こうしてここに立っているこの男をだよ、あなた個人として聞きたいんだら」、「あなたにだよ、そして……みんなにだよ」、「あなたたちやろうとしていることもわからないことではないんだ。だけど俺には関係ないんだな、これからもこんなことを続けるなら俺はもう出てこなくていい、どうせ脱獄はできているんだ。」彼の言葉は法廷の空に向けてはらたけに響きます。「おれがこうなったのはどんな原因によると思うの……こういう事件がおきたのは、あのころおれが無知だったからだ。」

それは貧乏だから無知だったんだ。……今、ようやくわかった。東狗犬で勉強してわかったんだ。俺のような男がここにいるのは、何もかも貧乏だからおこったんだ。俺はそれが憎い。憎いからやっつたんだ。」この言葉、この彼の叫びを私達は無徳で見るのでしょうか。「裁判とは所詮、体制を維持するセレモニに過ぎないのです。街頭台にのぼることが決まっている永山則夫にとって、これほど空々しいセレモニはないのです。めざめた彼は慰安された生を少しでも多く勉強して過したのです。それを彼も恨んでいるのです。貧乏が悪いんだ、無知がそうさせた、彼が言う時、私達は何と答えることができるでしょうか、彼にはかく言う権利があるのです。生い立ちがそれを証明しています。貧乏が無知を生み、無知が犯罪を生むことは事実なのです。裁かれるは一体誰なのでしょう。か？ 獄中ノート第一分冊に前書として次のように記してあります。「フット君、私は君を擬人化して書いていくつもりだ。ある時は君に君を失うような事を言うかも知れない。また、ある日、君にハツッ知りなかも、そして君をバラバラにするかも知れない。何日か私は、君との世界を確立する積りだ。何日も君を見なくとも何か月も君を手離しても、私は君に会いたくなり、そして帰っていくはずだ。君の元へ……。」と、ここには彼が獄中記を書くにあたり何かをつかもうとしていることが現われています。どうして自分のような人間が存在するのか、それを知りたかったのでしょう。この彼の姿勢はやがて彼を階級的に自覚させていきます。第二分冊では早くもそれが現われています。ホーおじさんよなら、という詩にそれが見られます。初期の自覚です。

パツク・ホ

貴方は偉大な人でした

ばくも人として

貴方の去ることを恐みます

パツク・ホ

貴方は人民を愛しました

ばくも貴方を愛します

貴方は下級民の英雄です

それを連れ私は私の隠れた事自体が伝々と書いてしまわなければならない……これを彼の罪の責任転嫁だと言うことはた易いことです。しかし、僅か十八年の生しか生きていない人間の書いたものとして読む時、この文章はあまりにかわいていないでしょうか。何か悟りきった、世にすねた、ニヒリステイックなものが漂っています。全てを失った絶望の後のかわきのようです。私はこの文章を読んで、この文章の第一節を想い出しました。「本当の絶望の後は笑いが来るのさ；本当の悲しみの後はかわいた笑いがあるのさ；」という簡潔なフレイズの繰り返しのものです。涙が出る悲しみなんて苦みではない、叫び声が出る苦しみの限界からの叫びの歌です。抑圧と搾取と非人間的な人種差別の中から生れた黒人のブルースに似ているのです。彼が逮捕された時一八才でした。意味なき殺人者である彼は何故も精神鑑定を受けさせられました。しかし、彼は正常でした。マスコミは彼を現代犯罪史上希な犯

彼はこの詩で何が言いたかったのでしょうか、別に深い意味はないと思います。彼はただ、自分と同じ貧しい人々のために生運を賭した革命家の死に純粋な気持ちで悲しみ表現したのであり、その生き方に素朴な賛辞を与えているのだと思います。初期的な階級形成です。この彼の初期の追求し、分析していきます。第三分冊には次のように記されています。

「私は殺人者である。凶悪でもか言えない人者である。言通断な行爲であった。罪の自覚も年を取ることと徐々に精神的に苦患すると思うが、今は若干の意識しかないのである。私はジャンクラ、チンクラ、この上に生き伸びていくかないので、分って戴きたいのである。元々、私の命にない主義から始ったためもあるし、生きていても、所詮先は見えているのもあった。一口に言ってしまうれば不運な男であった。例えは出生地のこと、面の傷跡……育った家庭が一番何ともいえない不運の要因であるが、今さらわめいた所で仕様のないものであり、

罪者としてジャーナリストチックに書きたてられた。しかし、何故永山則夫が無意味に四人も殺したのか結論を下させませんでした。殺人をさせたのは何でしょうか、フ・ファンがある殺人をした少年と面接を通して、殺人への動機を分析したものの中に次のような例があります。一人が白人で二人が黒人である三人の少年のグループがありました。ところがある日、二人の黒人少年が白人の少年を突然ナイフで殺したのです。白人の少年とは仲が良いと高聲に叫んではないと述べています。「白人の少年」彼は良い友達だったとも言っています。では何故殺したのでしょうかに述べています。彼は白人だ、だから殺したんだ。白人は黒人を殺す、彼はやがて白人の人の前に殺したんだ。警官は白人だ、白人が黒人を殺して逮捕されたことがありますが、確かにこれは植民地時代のアルジェで起った事件です。人種差別と

ひどい抑圧の下で。しかし、抑圧の蓄積が本能的に抑圧者への反発としての暴力として現れ得ることを証明していることは確かだと思えます。永山則夫の意味なき殺人がこの例と全く同じだと言いません。しかし、あまりに酷似しています。あるいは人種差別という現象的なものがないだけにその根はより深いかも知れません。彼を殺人へとかりたてた何かがこれが無いと言えるでしょうか彼のこのかわいた考え方はやがて問題の本質へと近づいていきます。資本主義社会における矛盾を知り始めたのです。そこに自分の存在を必然的な存在として発見したので。分冊が増すとに彼の文章は文章らしくまとまり、その内容もはっきりとしてきます。資本論の読了後、彼はもつというんことが知りたくなり、また、自分の考えていることが正しいのか否かを確かめたくりました。そのチャレンスは公判の折、留置場で一緒にいる学生運動の闘士と討論することです。彼の階級形成はこうして進んでいきます。第七分冊には次のように記されています。

「それで今度の裁判の日、若し学生と一緒になつたらばと虎視眈々とした心機でその場に臨んだ。そして、私の希望通り事は運んでくれた。普通だったら、全学連闘士と議論と語るかどうかと思うが、兎に角、それしき会話をしてみた。やっぱり、本当にやっぱり、あんな坊ちゃん育ちと思つていた中にも本物がいたと知つた日である。そこで、これはならないのだ絶対に」そして、この後に留置場での学生との会話の様子がつぶさに、実にいきいきと記されており、この経験がいかに彼にとって重要であつたかがうかがえます。やがて彼は人間の存在と死を考へるようになり、もつと世界を知り、歴史を知りたいと考へるようになるのです。全てを知つて死んで避けるのならそれは素晴らしい一人生だこの文章の最初に記しています。彼のこの言葉をいかに解釈するかは自由でしょう。しかし、永山則夫は無知ではなくつたのです。何故なら彼は自分が無知であることを悟つたからです。今では、どうして貧乏人が存在するのか知つているので

人民への差別と抑圧が危急な問題となつていふ今日、是非とも自己を点検する意味で一読すべきものだと思います。

井上光晴編集のこの「辺境」三号には他に、井上自身の「掲載されぬ『三島由紀夫』と『国を守ることは何か』」という、朝日新聞と新潮社に依頼されて書いたにも拘らず、内容云々という事で掲載を拒否されたことについての小論文が巻頭にあり、また、辺境レポートとして徴用被爆者の生體を生々しく伝えています。日帝の犠牲である韓国徴用被爆者

す。人間の歴史が階級闘争の歴史であることも、彼は初めて人間としてめざめたと言ふべきかも知れません。第八分冊では李珍字の「罪と死と愛と」を読み、その読後感想として、李珍字にならなみならぬ興味を寄せています。さらにおぼろげながらも革命の必然を意識しはじめています。彼の階級形成がとうとう共產主義革命の必然へまで昂められたので。第九分冊には明瞭となり次のようにびつくりするような論理で革命について記しています。「日本人の心理」という南博氏の著わした本を流し読みました。そして思うのは、この日本資本主義国家体制を変革するには先ず、天皇制を廃止しなければ絶対的に革命は成功しないであらう、ということである。私が、天皇制、という時、反駁される輩共もあらうが、その輩共は革命が成功した場合、真先に血祭りにあげられる現ブルジョワ共であるのだ。」戦後日本においてはタブーであつた天皇制を、彼は明快に否定しているのです。さらに、明治時代に確立された天皇制は軍国主義の象徴だとも

の実態は読む者をして、日本民族であることに後めたさを感じさせずにおきません。入管闘争が果してこれで良いのかと思わず考へさせられます。排外主義・差別・抑圧の現実と歴史は厳しく私達を告発しています。石牟礼直子の苦海浄土、

第二部、葦船の章も掲載されており、また、マスコミの洪水の中の非商業的な良心的なこのような季刊雑誌はマスコミの在り方についても何かを考へさせます。その意味でもこの辺境は一読に値するのではと思われまふ。ただ非商業的な

彼は言っています。そして次のように結論しています。「天皇家族には罪はないかも知れんなどと躊躇してはならないのです。その存在がある以上罪は歴史としてあるのである。現代日本社会では天皇制は治安を守護するために必要であるというが、その治安を守護する社会は資本主義経済社会体制なのであるのだ。この資本主義国家というものがどんなに民衆が悲惨な生活をしていても、ということをおぼろげに思惟するのであつたらば変革しなければならなくなるのは当然であることが理解できようであらう。」と。一体、何が彼をこ言うわしめたのでしょうか。日本中を騒がせた射殺隊がどうして、マルクスを読み、ドストエフスキーを読み、哲学を勉強しはじめたのでしょうか。この答は永山則夫を殺人へとかりたてた何かがあるの上に欺瞞的に坐り続ける限りこの答えは不明です。永山則夫を殺人へとかりたてた何かを今こそ私達が自己に厳しく問い、止揚しない限り、第三の永山則夫は必ず出現すると思ひます。在日アジア

雑誌であることが災しての備の高さが難ですが、グループ購入して回し読みしたいと思います。

完

季刊雑誌「辺境」三号

(1971年1月)

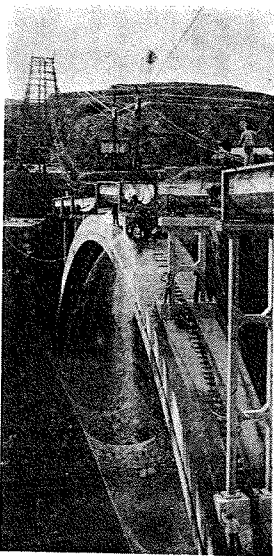
井上光晴編集

(定価700円)

〈辺境社〉

(一九七一年二月)

大阪阿倍野区(於)





ルイ・アルチュセール

《魅るマルクス》

(河野健二 田村椒訳)

人間主義の徹底的否定

渡辺 幸博

一九三〇年代、若いマルクスの草稿が陽の目を見た時、フランスの社会民主主義者たちはこれを新マルクス主義の出現であるといつて拍手をあげて歓迎し、もちろん、このことは基本的にはこの初期マルクスの著作が深いヒューマニズムを基調とするものであったことによるわ

けであるが、特に、スタリーンの没後起こったスタリーニ主義批判と関連して、この若いマルクスの著作が教条主義化したマルクス主義に人間性を回復するものとして改めて称揚される傾向がみられたのは周知のとおりである。

初期マルクスの立場を強調することは、硬した教条主義、官僚主義ひいては恐怖政治さえおもたらしめたスタリーニ主義に對するブルジョアイデオロギーたちの攻撃、あるいは、マルクス主義の共産主義の非人間性を強調する反革命的動向に對してマルクス主義を擁護するという意味をもたないでもないが、一方それは、ある意味でマルクス主義そのものを歪曲するといふ大きな犠牲を要求するものでもあった。

ての考察を不可能にすると、およびマルクス主義理論を混同する修正主義の危険を有するといふ二点を指摘している。なぜなら、マルクス青年期の著作から「資本論」を一個の倫理的理論であるとすると結論が導き出されるとすれば、『資本論』自身が科学的思考の産物ではなく、むしろイデオロギー的思考の結果であるということになるからであり、ひいては、イデオロギーの地盤の上でマルクス主義を人間主義的思想とすれば、修正主義に陥ることなく、いかにして教条主義を脱するかということが緊急の課題となる由縁である。

今日、マルクス主義にとって、修正主義に陥ることなく、いかにして教条主義を脱するかということが緊急の課題となる由縁である。ここに訳出されたアルチュセールの著作は直接この課題に答へんとするものである。邦訳では二巻に分かれている本書は、一九六〇年から一九六五年までの間に発表されてきた七篇の論文からなっている、その折々の主題にもかかわらず論旨はつねに一貫している。

いうまでもなくその基調は「科学としてのマルクス主義は科学」というところにある。そしてそれは初期マルクスの諸著作と後期マルクスとの間に認識論的断絶があるという認識に支えられたものである。ここでいわれる認識論的断絶とは科学と理論的イデオロギーとの断絶を意味するが、ここにイデオロギーと科学との区別、あるいはその関係ということがさしあたっての主題となる。すでに期からいわれるが、「科学としてのマルクス主義」といわれるのが、イデオロギーと断絶されたマルクス主義の意であることが確認されるのである。

「フォイエルバッハの『人』の哲学的宣言Ⅴ」という第一の論文はこのことをめぐって展開される。すなわち、若いマルクスの著作がフォイエルバッハの思想に深く浸透されていたことについては改めていうまでもないところであるが、アルチュセールは「ドイツ・イデオロギー」が、このフォイエルバッハの哲学とその影響からの意識的決定的な絶絶をせしめ最初

のテキストであったという。つまり若いマルクスの観念論的『人間主義』のあらゆる形式はフォイエルバッハの形式に属しており、したがって、マルクスが「人間の歴史の理解のために倫理的な問題意識を適用する前衛的なフォイエルバッハ派でしかなかった」ということが確認されるのである。

このことからマルクスのフォイエルバッハとの断絶の意味が明確される。それかつての哲学の意識の清算であり、新しい問題意識の採用にはかならない。だからマルクスがフォイエルバッハとの断絶のうち自己を発見したという認識は、ヘーゲルとの断絶をも含めて、哲学という用語自体の意味をも再吟味するものであったのはいうまでもない。

「若きマルクスについて」という第二論文は当然第一論文をふまえたものである。そして、それはマルクスの転回をめぐる方法論的把握の解明でもある。この方法論上の要請は初期マルクスにおける基本的なイデオロギーの場の内容と構造との実質的な認識を前提としている。ア

ルチェセルが「問題意識Ⅴ」という言葉を用い、それを全体性というヘーゲル的な概念のあいまいさと対比しているのはそのためである。すなわち、問題意識はある限定されたイデオロギーの思想におけるあらゆる要素を統一する典型的な体系的構造を明確にすることを可能にするものであったのである。このことはアルチェセルにとって、その考察を特徴づけるものが考察の題材ではなく考察の様式であるということの意味である。いふならば思考の「対象が考察される」起点となる根本的問題意識に照明が与えらるるのであるが、それはある著者が与えられた考察領域のみならず、ある一つの思想についてのあらゆる可能な思考の具体的で限定された構造を明らかにすることが問題であるということである。なぜなら、この際、考察の対象となる個々の思想に固有な問題意識は、イデオロギーの場面に属するさまざまな思想に固有な問題意識と関連させることによって、はじめてその意味を明らかにすることができ、その意味を明らかにすることができ、ある思想の発

したがって、矛盾が革命へと志向されるためには一個の統一された破壊元となるような状況と潮流との集積が必要である。その場合、矛盾は決定するものであることも決定されるものである。アルチェセルが重層的決定と名づけるのはこのことである。そこには純化された図式の単純さに対するきびしい批判がある。しかもそれはヘーゲルの思弁哲学のみに向けられるのではなく、マルクス主義の公式主義にも向けられていることに注意しなければならぬ。アルチェセルは図式化が、かつてマルクスによって否定された空想的社会主義との共通点をもっていることをするどく指摘するのである。

つぎにこの重層的決定の基礎をマルクス主義歴史理論の概念そのものなかに築くということが問題となる。マルクス主義歴史観がヘーゲル歴史観の単純な顛倒ではないこと、つまりヘーゲルの単純な内的原理のかわりに別の単純な原理（物質生活、経済）をもちだす経済主義、技術主義が否定されるのである。す

展、展開の意味はその思想および、その思想をとりまくさまざまな思想に固有な問題意識によってのみ正しく把握されるということである。

いうまでもなく、この方法論は思想、あるいはイデオロギーの歴史の真実その原理や帰結にあるのではなく事実そのものなかにあることを指示している。明確に言えば、その思想の真実が問題意識というかくれた土台のうえにある意味、主題、対象の環節をもった構成のうちにあるということである。この観点に立てば、たとえばヘーゲル哲学の単なる顛倒Ⅴということとは、ヘーゲルと同じ問題意識にとらわれているにすぎないということになる。アルチェセルの観念論的な理解から生ずる幻想を排するのみでなく、若いマルクスのテキストがわれわれに与える印象にひきずられることなく、またマルクス自身の自意識にもとらわれることなく、現実の歴史について語ることを、すなわち、マルクスの歩んだ道Ⅴをそれ自体の問題にすることをめざ

なわち、マルクス主義にあつて「一方では生産様式（経済的）による最終次元での決定があり、他方では上部構造の相対的自律性とその独自の有効性がある」。

経済的決定によらず有効な諸決定、アルチェセルのいう重層的矛盾という考え方はこのことにつながるものである。重層的決定が普遍的事実であるかぎり、そしてわれわれが現実から出発せざるをえぬかぎり、社会のあらゆる矛盾とあるゆる構成要素からなる重層的決定が出発点となるのは当然のこととなる。

第四論文「ハピッコロⅤ、ペルトラッチ」と「プレヒト」は若干おもむきを変えたアルチェセルの演劇論である。しかしわれわれはむしろここにアルチェセルの方法論の基本的在り様を具体的に読みとることができる。それはこの論文が作品解説における「潜在的構造のむっ力学」をはっきりと示すものであるからである。しかもそれは第三論文のヘーゲル弁弁法の単純な意識の批判と結びついた唯物論的演劇論でもある。たとえばアルチェセルはプレヒトの作品

すものであったのである。そのことはマルクスがヘーゲルのイデオロギーをただ単にアウフヘーベンすることによって科学的立場に到達したのではないという結論に導く。すなわちマルクスの青年期が自らとらえられていたイデオロギーのくびきを脱して自ら歴史の現実を発見する道程にはかならなかったということである。

第二論文で「ヘーゲルの顛倒Ⅴ」という概念のあいまいさを論じたアルチェセルによって、資本論第二版後記にある「ヘーゲル弁証法の顛倒」という場合の顛倒はいかなる意味に解されねばならぬか？「矛盾と重層的決定」なる第三論文の主題となるのはこのことである。

ここではもちろん思弁哲学の単なる顛倒は問題ではない。つまり、弁証法の方をひっくり返すことが問題なのではなく、弁証法の構造を變形するところが問題となる。矛盾をモメントとしてヘーゲル弁証法とマルクス弁証法との差異を明確にすることこそ、めざされるべきものであったのである。いうまでもなく、現実の矛盾は図式的抽象的なものではない。

を「その意味と内容を自己意識」という形式で主題化することを諦めた作品」と定義するが、それはプレヒトが古典的問題意識を顛倒したということも承認である。一つの社会、あるいは時代の自己意識、つまり自己自身の透明な神話のなかで自分の全体性を生きた自己意識にはかならないが、プレヒトの戯曲はその自己意識を否定するゆえに、すなわち、意識の幻想（神話）を批判するゆえに中心を欠いたものとなるというのである。主役を無に帰する構造上の力動性は、歴史を作るのが大案であつて主役ではないということを示すもので、同時にそれはまた自己意識を無に帰する現実的矛盾の重層的力動性を示すものであるのだ。アルチェセルの演劇に対する姿勢はそのままマルクス主義に対する彼の態度と相通する。ちなみにこの論文のなかにある観客と変居という単語を、それを読者、マルクスの著作という言葉に読みかえてみると、その間の事情がよりはっきりと客である。

一八四四年の草稿に関する第五論文はさきの第一、第二論文を具体的に補足するものである。マルクスにおける認識論的断絶を認めるアルチュセーセルにとって初期マルクスの立場がマルクス自身によって否定されねばならなかったブルジョワ・イデオロギーに立脚していたという認識は八科学の社会主義Vを樹立したマルクスにあつて、問題がただ単なる空想主義的社會主義の不毛な論議を脱するためのものである。つまりそれは現実を正しく示すのである。つまりそれは現実を正しく見すえたマルクスが直ちに精神主義的、意識中心的神話の虚妄性を打破していったことを意味する。しかもこれは決して人間を否定するものではなく、むしろ人間を具體的現実世界でも正しく把握しようということであつたのである。

以上の諸論文は主として初期マルクスをめぐる認識論的断絶に関するものであつたが、この断絶によつて生まれた科学的社會主義が史的唯物論であり、そしてこの史的唯物論がいわゆる弁証法的唯物論によつて支えられていることについて

るということを示すものである。なぜなら、現実から離れた抽象的精神を否定して、与えられたものを認識に転化する科学こそマルクス弁証法にはかならないからである。もつともマルクスは歴史科学の発見という科学的実践にあつて「弁証法」という本を書いてはいないが、アルチュセーセルは唯物弁証法がすでに史的唯物論を生んだマルクスの理論的実践のうちに存在していたと解する。アルチュセーセルが一九一七年の革命についてのレーニンの文章のなかに、直接書かれていないにもかかわらずマルクス主義弁証法を説きわたつたのも同じ観点からである。このことは唯物弁証法が現時点における自分自身の行動について考察をめぐらす革命的指導者の実践のなかにみられることであるが、これがマルクス主義哲学の教条主義的傾向を阻止するものであることはいままでもない。唯物弁証法は実践状態における弁証法として具體的現実と立脚した理論的実践であつたのはあり、その意味からでも抽象的理論と明確に訣を分かつたものであつたのである。

はここで改めて断るまでもないが、アルチュセーセルはこの唯物弁証法をマルクス主義哲学と名づけ、さきにも彼が否定した哲学と区別する。ところで、マルクス主義が科学であつてイデオロギーでないはずれば、科学としてのマルクス主義哲学とはいかなるものであるのか？第六論文「唯物弁証法」はこれに答えるものである。

アルチュセーセルによれば、科学の理論的実践は科学の前提における前科学的なイデオロギーの理論的実践から明白に区別されねばならない。しかもこの区別は質的不連続という形式をそなへていべきである。さきにもアルチュセーセルが八認識論的断絶Vと呼んだのはまさにこの不連続にはかならない。アルチュセーセルによつて理論とは「科学的性格をもつていふ理論的実践」の意である。一方この理論的実践に関する理論、経験的実践にもつづくイデオロギーの唯物科学的真理へ変えてゆく理論がある。アルチュセーセルは後者を弁証法的唯物論と一体をなした唯物弁証法であるという。彼が「

る。

しかも、いま一つ興味のあることは、科学的実践の認識性から科学の抽象化のもつ有効性・現実性とは明らかにされていふ点である。具體的イデオロギーの否定として生まれたマルクス主義科学と現実の一般化抽象化としての科学との区別として示されたものである。アルチュセーセルはここにマルクス主義における科学の独自性を見るわけであるが、それがさきにも示されたハイゲル弁証法の顛倒Vの意味に密接につながりうることはあるものでもない。すなわち、単純性が起源にあるのではなく、逆に構造化された全体こそが単純なカテゴリーにその意味を与えることができるのであつて、マルクス主義的科学はまさにそこに立脚しなければならぬといふのである。このことはマルクス主義が原として具體的ならゆる対象の複合的な構造をもつ所を認知するということである。

これらすべてをみてきたことから明らかにように、マルクスの科学的発見はブルジョ

「二重の意味で理論は実践に関係がある」という時、そこでは科学に基礎づけられた革命的実践のための理論と、理論的実践に関する理論である唯物弁証法とが指示されている。

ところで、理論(唯物弁証法)を用いること、理論(唯物論や弁証法)の公式を問ひて存在する内容に適用することに帰着するものではない。なぜなら論上の概念を外から適用することは理論上の実践といわれるどころか、むしろイデオロギー面での拘束と化するおそれさえあるからである。とはいへ、弁証法の諸形式の適用に際して、教条主義を拒否し理論的実践の自発性を信頼するだけでは十分ではない。アルチュセーセルは理論的実践がたえずさらされている概念論による攻撃に対して、弁証法的唯物論による戦いが要求されるというのである。したがつて、アルチュセーセルが「唯物弁証法が自体を必要とする」といふ時、それは具體的には人間中心の概念論の虚妄からの脱出こそが何よりも真に具體的な現実と立脚することを可能にする

「ワ・ヒューマニズムとの断絶を意味したが、それは「マルクスが過去の哲学の問題意識を拒絶し新しい問題意識を採用した」ということであつた。もちろんセーセルがすべてのイデオロギーを虚妄として否定しきつたということではない。もともとイデオロギーにあつては、実践的、社会的機能が理論的機能に優つていのであるが、マルクスにおけるヒューマニズムの拒否はヒューマニズムが理論ではなくイデオロギーであるということの確認を意味する。「ヒューマニズムも、ごくイデオロギー上の概念を、あたかも理論上の概念であるかのように区別もなく条件もつけず使用するのは危険である」からである。

第七論文「マルクス主義とヒューマニズム」の主題はヒューマニズムに関するものである。アルチュセーセルも社会主義的ヒューマニズムという言葉の流行が教条主義化された非人間的スタリニ主義に対する反動であることは十分に知っている。ただ問題はそれを十分にせ

初期マルクスの人間主義に助けを求めねばならないのかということである。このことはアルチュセールが、ただ単にイデオロギーを否定するのではなく、むしろヒューマニズムの理論面での自負を拒否して、そのイデオロギーの実践機能を認めたくらんで、現存する問題にそくした新たなイデオロギーを求めざるべきであった、安易に初期マルクスに戻るべきではないと考えていることを示すものである。

以上、本書におけるアルチュセールの論旨を掲載順序に従って簡単に紹介してきたのであるが、改めて申すまでもなく、これらの論文に一貫している基本的共通点はそれらのすべてが初期マルクスの著作と「ドイツ・イデオロギー」以降のそれとの完全な断絶という認識のうえに立つものである、という点にある。そしてわれわれはそれがイデオロギーと科学という問題に収約されているのを見てきた。アルチュセールによれば科学としてのマルクス主義は実践的イデオロギーから純化されたものとして、いかなるイ

がアルチュセールのこれからの研究方向を確定するいわば序論ともいわれるべきものであるとすれば、そこにまだまだ多くの疑問点が残るのもまた当然であろう。たとえば、マルクス主義哲学として

イデオロギーの偏見からも逸れているという特色とする。そして、それがそれが実践的マルクス主義の正当性を保証しようものであるとすれば、いかなるイデオロギーであるか、それが理論を歪曲するものであるかぎり否定されねばならないのは当然であるということになる。

しかし、ここにもなお問題が残る。というのは、マルクス主義的著作といわれるものなかで、科学とイデオロギーとがそれ程明確に区別されたかということである。もともとアルチュセールはこの種の反論を早くから予期していたに違いない。それは彼がマルクス主義における科学の定義をつねに具体的現実の構造との関連からとらえていることからも推察される。そしてそれが彼をして、唯物弁証法をイデオロギーとしてではなく哲学として科学の側に置かした最大の理由であったと思われのである。われわれはその定義の意は別としても、ここに新たなマルクス主義的科学論、教条主義無縁な科学論の可能性をみるができるだろう。

の唯物弁証法が社会主義的イデオロギーではないとする所論はともかくとして、ここで彼のいう社会主義的イデオロギーなるものの実態が明確に示されていないかぎり、科学とイデオロギーという問題

共同性と天皇制

〈大正期における近代化の意味〉

米村 喜久 男

1.

大正期という時代は日本近代史の大きな転換点の一つと考えられている。経済的には、明治維新によって封建制の土台の上に資本主義の生産様式を乗つけた時から始まる。その様式と土台との格差に

よる資本の発達膨化のパターンが有効性を失い、日本資本主義が最早己れ自身の論理で発展しなければならなくなった時期と考えられる。思想的には、最早「上から」の近代的な啓蒙の必要性のなくなった時期と考えてもよい。政治的には、今こそ明治維新、明治国家の指導者達が、真にその責任を引き受けねばならなくな

ところ、アルチュセールが彼自ら否定しているにもかかわらず、構造主義者の列に加えられているのは、もちろんいままできたように彼の立脚点がつねに具体的現実を即した構造にあるということによるものであるが、さらにわれわれは彼の立場が、いわゆる構造主義とひとしくブルジョワ的人間主義の徹底的否定を大きなモメントとしており、加えて、作品を現実にも押し込めようという方法にもまた構造主義といわれようものを秘めているからであると考えられる。

いざにして、アルチュセールは自らのマルクス主義研究にあたっての基本的方法を「マルクス主義の中心思想は具体的状況の具体的分析である」というレーニンの言葉でもって示している。そしてこの基本的姿勢にもとづいたマルクス主義理論でもって、マルクス主義内部にある教条主義、公式主義を克服すること、これがアルチュールのさしあたって自らに課した課題であったと思われる。

もちろん本書はこの課題を完全に果たしているとはいえないが、これらの諸論文に関しても、アルチュセールの立場は未だに不明確であるといわざるをえない。今後のより詳細な展開が期待されるわけである。

(文学部助教 櫻)

った時期である。しかし事實は彼ら指導者達が明治期を通じて保ら得ていた見せかけの「偉大さ」のメッキをはがれ落として、今日まで続く「矮小性」と「無責任」を遺憾なく発揮し始める事象として進行する。このことは政治指導者達が支配に対する自信を喪失したことを物語っている。封建体制の制度的破壊とその後の初期資本主義の勃興に伴う大衆の上昇感覚を預言として明治国家を指導してきた彼らは、今やその唯一の預言を失い、既に高度に発達してしまった国家制度と資本を維持するためにいかなる原原則、破壊的も手段を講ずべきかという所にまで「顧慮」したのである。

この事態はまだ大衆にも当てはまる。

明治國家の上下を貫通するパイプが、資本主義の膨脹に支えられて大衆の心情を、あるいは立身出世という形で上へと吸収し得た間は國家は栄光の存在であり、故郷は錦を飾るべき対象であった。しかし、資本主義が停滞に陥るやその上昇感覚は實質的な有効性を失ひ、同時にそれまで資本の蓄積な収奪を受けて崩壊に瀕していた農村は豊阜帰るべき故郷としての意味を喪失したのである。丸山真男の言う「天皇への距離」という社会的価値基準が實質的な有効性を喪失したということである。そしてここに初めて天皇が實質的な上昇感覚の頂点としてのシンボルから疎外され、著るしく觀念化されて、一つの題題的なシンボルと化す可能性が生じる。即ち、他人を押し下けても自分だけが生存しようという資本の論理の大衆への定着と同時に、超越倫理としての天皇主義イデオロギーへの開化が不可分のものとして出現してくるのである。そこには、天皇が常に大衆の心情の空白部分を補うかのように存在して、國家へと上昇する大衆の精神過程からは

収奪によって自己喪失に陥った時に、あたかも心情の空白部分を逆無するようにならねばならぬ。天皇主義イデオロギーには抗することが出来なかつた。

この期の思想動向としては、他に國家社会主義と呼ばれるものがある。これは膨脹停滞した資本の焦眉の要請たる「合理化」の政治的反映としての社会ファシズムである。即ち資本主義の本質的な無政府性に起因するところの諸矛盾を、統制機構としての國家による強力な統制によって是正しようとする思想である。この思想は國家をそれ自体として存在するものとして捉えるために、資本の要請の少し行き過ぎた政治的表現に終つてしまふ必然性をもつ。

2. 超國家主義を論ずる際に最初に遭遇する困難は、一体何を超國家主義と呼ぶかということである。丸山真男は明治以降の天皇制支配体制そのものを超國家主義と呼び、大正期以降太平洋戦争に至る時

み出た部分を背負ってきたために、國家からさえも微妙に異った位相に存在し続けてきたという事情が関わってくる。だからこの点からみれば、明治における天皇はむしろ最も世俗化された在り方に置かれていたといえる。そして大正期以後、「國家」と「天皇」との間に微妙なズレが生じた時初めて徹底した天皇主義が反國家の様相を呈する可能性が生れる。

大正期を転換期とした現象は天皇主義イデオロギーの登場ばかりではなく、吉野作造の民主主義論を中心とする大正デモクラシーと呼ばれる思想動向がある。この運動は明治以來初めて、表現された「民衆」を正面に打ちかざした政治運動であった。その持つ意味は久野収によれば「明治以來の國と家を中心とする國家主義を、土から國と家を支える立場からではなく、下から國と家を支える立場から改革しよう」とわだてていたことである。松本三之介は、「民主主義論は政治を民衆自身が自らの意思を媒介として自らの利益を追求する体系と

期の思想動向をファシズムしかも明確な切れ目を欠いた「なしくづし」のファシズムとして取り出している。この分析は思想動向の「なりゆき」を眺めるために可成な有効性と説得性をもつ反面、思想が決して内側から捉えられることがなく、一種の風俗現象としてしかみられることがない。橋川文三は丸山の方法を「それはいわば日本超國家主義をファシズム一般から區別する特徴の分析であつて日本の超國家を日本主義一般から區別する視点ではない」と批判し、ロリスムを基軸として朝日吾吾による安田善次郎が害以後の思想動向を超國家主義と名付けている。「超」國家主義という言葉の正しい意味からいへば後者が正当だと思つた。橋川が「超國家主義の無限適及」として批判する、丸山の「中心からの価値の無限の流出は統制と無限性（天壤無窮の皇運）によって担保されている」

「統制（時間性）の延長即ち円（空間性）の拡大」というテーゼは、その図式的な表現のもつてつけな以上の重大な意味を秘めていると思われる。何故なら

して構成し直すことによつて、政治の世界を道徳という觀念の世界から、利害をめぐる現実の世界に引き降す味をもつものとなつた。」と説明している。結果的にはこの運動は早々と挫折することになり、その後を受けて超國家主義が急速に成長せるを得なかつたのは、単にそれが外來思想の直輸入であつた、大衆の「意識」が低かつたという理由によるのではなく、大衆が直視的の下から國と家を支える」とか、「自らの意思を媒介した政治」といった理念の持つ矛盾を察知していたことによるのではないかと思われる。即ち、全てで「政治」を「お上」として疎外することによって自己の意識から排除する術を知つている大衆にとつては、そのような理念が自分達を甘言によつて政治の次元へスッポリとからめ取ろうとするムシのよい手管に過ぎない事は直視的に自明であつたであろう。このことは今日のいわゆる「民主主義」についても当てはまり得ると思う。ただこの大衆を強固な非政治思想も、生活基盤の

日本の超國家主義は天皇主義イデオロギーと切り離しては考えることができない。「天皇の」要素が薄れしまつと、それは単なる社会ファシズムに容れられてしまふことは以後の歴史が語る所だからである。だから超國家主義はその振幅のうちには國家社会主義や権威郷を代表とする現実的な農本主義をも含んではいないが、天皇主義を基軸として考察していくのがよいと思つた。そこで超國家主義を強引に定義するすればこうである。極度に抽象化された天皇と、こまめに抽象化された農村、農民を直結することに、よつて既存の國家体制や経済体制を打破しようとした觀念的な革命運動である。

かかる視点からみると、超國家主義の様相は概ね次のように言ひうることができよう。明治初期において國家は天皇と密通することによつて何らかの価値的な存在として擬制され、同時に資本主義勃興に照応する心情的な上昇感覚は立身出世として國家の方へ吸収してゆくべく擬された。しかし実際には、國家とは権力的抑圧の体系であり、上昇感覚は他人を蹴落

しても自分が這い上ろうというエイゴイズムに過ぎない。当初はそれはうまく隠蔽されて倫理の体系を形造つたが、資本主義の膨化停滞はその体系に裂け目を入れた。この時点に至り、現実を剝奪された精神達は天皇に直結することによって現実の思想へと集中してゆくこととなる。まず自分達をこの領地に追いやった「資本主義的なるもの」への反抗、そしてそれを制度的に支えきた機構としての國家への非逆であつた。そこで心情を支えたものは非逆としての天皇であり、非在としての農村であつた。即ち、勃興期資本主義の上昇感覚の消滅によって現実の上昇感覚の収斂点としての意味を喪失した天籟は、上昇感覚を失つて投げ出された精神達のいわば非現実的秩序の頂点となり、一方膨化資本主義の苛酷な収奪によつて現実を剝奪された農村は精神の現実的な痛痒点としての意味を喪失し、精神達のいわば非実在的基盤となつたのである。これから、かの権藤成郎らの現実の合理主義的農本主義とは異なる非現実的農本主義が生れてくる。そして天

時の状況を経済的貴族国時代と定規する。かつて戦国時代の群勇割拠が徳川の統制的封建体制に移行した如く、現時の経済的貴族性制もツラストを通じて統制されつつあり、ここに政治的公民國家への変革であつた明治維新と両輪をなすべき、経済上の維新革命が予言されるのである。政治的な主権が君主から貴族、そして國家の手へと移行した如く経済的な主権もまた、経済的貴族の手から國家に移されねばならない。實際に、中世においては藩兵制であつた軍事組織が明治維新後徴兵軍隊に変わったように労働組織も徴兵的労働組織ならざるを得ないのである。とはいえ、それは通俗的な國家主義主義ではない。それは通俗的な國家主義主義ではない。北の宮う「社会民主主義」に至つてこそ個人主義相方の全き完成が得られるのである。と。ここでの北は國家という若は類として譲らぬものの、殆んど当時の社会主義者達と異つてはいない。彼の超論理が縦横に展開されるのは第三篇においてである。ここで北はダーウィンの進化論を拡張することによつて政治歴史、倫理の全ての側面を把握し

皇門農村を基軸として「近代的なるもの」への反抗という要素も加わつてくる。その故に超國家主義の革命プランには都市労働者の存在が無視される傾向が生じる。超國家主義のもつ反資本主義の傾向は、資本家・労働者を共に含む、文字通り「生産様式」として除外された資本主義に対する反抗として出現したために、農民同様、否それ以上に疲弊していった不均、都市労働者は何らの救済の幻想すら与えられないこととなく思想動向から弾き出されたのである。反西歐近代としての農本イデオロギーにとつては、資本家、政党は勿論、労働者も労働組合も共に近代的なものとして排斥の対象となつたのである。この一見ヒステリックなまでの反西歐近代的傾向は逆にいえば、資本主義の隅々までの浸透に伴つて、近代的なるものが否応なしに定着してしまつた事を物語つてゐると考えてよい。ともあれ、超國家主義はその反現実性によつて反秩序的(革命的)様相を極点にまで高めたが、まさにその反現実性によつて実在の革命たることは出来なかつた

ようとする。國家はそれ自体、目的をもつて進化しており、やがてはヘーゲルの言う絶対理念の如きものとなる。一方、下等動物から進化して來つた所の人類は、「社会主義」の實現によつて初めて個性の全き發展を見、男女の雌雄闘争を通じて眞善美を体現してゆく。そして遂には脱糞も交接もしない「類神人」となるのである。「人類」は滅亡して『神類』を繋ぐ鉄橋である。このように高みに昇つてしまつた彼の論理が現実との間に一つの共鳴音を響かせるのは第四篇においてである。ここで北はあくまでも理性的な理論家であり、彼は日本の歴史を君主國時代(古代)、貴族國時代(中世)そして公民國家の時代(現代)への發展の経路として位置づける。そして明治革命と明治憲法によつて初め、天皇が國家の最高機関としての実体を獲得した今こそ、天皇を頂点に載く可の本質的な意味での國家の實現性が可能となるのである。第五篇は一種の戦略論である。目標の革命は「謂はば第一革命(明治維新)」の法律的理想と背馳する現今の經濟

のである。

次ぎの超國家主義の思想的統流としての北の思想をみてみよう。勿論、彼の思想が超國家主義の典型としてのそれであるとは必ずしも言い得ない、彼の思想のうちに確かに合理主義的・社会フアシズム的な傾向が含まれてはいない。しかしその合理主義はいわば超合理であるために却つて非合理非宗教の様相を帯び、その故に軍部青年將校達に代表される天皇主義的超國家主義者の思想的土壌を形成したのである。ここでは彼の二十三才の時の処女作たる「団体論及び純正社会主義」をとり上げてみたいと思つ

北のこの著作は、読む者に一種異様な感も与える。超論理ともいへば奔放な論理展開と飛躍的な類推・対比の積み重ねは、読む者に對してその全面的受容か、さもなれば全面的拒否を迫っているようにみえる。そこには彼自身「吾人は時に種の宗教的歡喜に全身の體懐を覚ゆ」と記しているような事情も与つた力があつたと思われる。しかし第一論での彼は正当な社会主義者にみえる。彼は現

実の政治支配すら次のように切り落されてしまふ。ただ、如何なる者が国家の目的と利益とに適合する主権の運動論の事案論に至りては、是れ自ら法理論とは別開論にしてその國家の主権を行使すという地位に在る政權者の意志に過ぎず。即ち事實上政權者の意志が國家の目的と利益とのために權力を行使するや否や法理論の与り知らざる所なり」と。國家改造の主張とは余りにうらはらな「政治的無関心」である。そしてそれは、國家体制はそのままにして政治の事実上の運営面において民衆本位を打ち立てようとする民主主義と好対照をなしている。

以上見たように北の思想はむしろ天皇主義イデオロギーとは可成りの距離がある。そして一見すると論理の自己完結に終つてしまふような北の論理が、皇道派青年將校による実践過程へと結びついてゆくのは、北が戰術的に提起した、天皇大権の運動による憲法停止を媒介してであると思われ。即ち北は北にとっての天皇はあくまで、國家の機関として圍

3.

超國家主義はその急速な政治的高揚にも不測、現実的には何事をも要えはしなかつた。それはマルクスの次のような言葉に包摂され得るものであつた。「特別な自衛の瞬間々々においては政治的生活はその前提である市民社会と諸要素を押し潰して、己れを人間の現實的な、矛盾のない類生活として定立しようと努める。しかしそれがそうできるのは唯、それ自身の生活諸条件の強引な否認によつてのみなのであつて、それゆゑに政治的ドラマはあたかも戦争が平和でもつて終るのと同様に必然的に、宗教の、私的所有の、市民社会のあらゆる要素の、復活をもつて終る。」だがこの政治的ドラマは、自余の政治的ドラマがすべて喜劇に過ぎなかつたのに対し、日本近代史上唯一の悲劇を構成した。

それはその挫折の仕方のうち天皇や國家というものの本質を歪曲させたというところによつて思想的意味を失つてい

家の内に包摂される存在でしかないのに對して、青年將校を担い手とする天皇主義イデオロギーの動向は天皇と農村の直結であり、北にとっては手段のみなされておき、北にそれは手段とみなされていた天皇大権の運動による國家改造のプロセスが、それを二・二六事件において実践しようとした青年將校達によつては「超國家」と同一化のプロセスとして受け取られたという差異が存在する。しかし北の思想が、情動として存在した青年將校達の心的傾斜に方向をプログラムを与える役割を果たしたことは確かであり、兩者の關係は、橋元文三の指摘する「超國家の『超』に合流する Ultra と Super の二割權」のうちの Ultra の方向を北が代表し、Super の方向は皇道派青年將校によつて担われたということができよう。

このようにして超國家主義は二・二六事件という大きな挫折の場へ自らを運んでゆく。その場において、明治憲法の論理的徹底化から國家改造を志向した北の思想は、憲法と國家というものはこの

いない。それは端的にいえば天皇というものがあるが、國家と運命を共にするものであるというところであるが、状況に応じて、「神」であつたり、「人間」であつたり、また「物」でさえも有り得るといふその鵝の姿身のうちに天皇の本質が隠されていると思われ。例えば明治期における天皇が「人格」としても偉大であると信じていたのは、勃興期資本主義に支えられて「人格」の上昇感性が現實性を持ち得たためである。ところが大正期以降の天皇が「神」にまで祭り上げられたのは、人々が現實のなかで己れの有限性をいやという程感じさせられておられるが無個性（神）への無意識的な志向を生み出していたためと考えられる。そこでは現實的な意識と無意識の心情は分裂をきたしており、大正期の天皇は「人格」的にのみむしろ愚人として捉えられていた。戦後における天皇は「何者でもない者」という絶妙な在り方を保っている。勿論、この「何者でもない者」といふ存在のしかたも「鵝の姿身のうちの一つに過ぎず、従つてそれを許すような思想

文面を徹底化すれば、その存在意義を失つてしまふやうなものとしてしか存在してはいないのだという現實の前に挫折し、一方、青年將校達の実践は、天皇というものは徹底し、それに合一化しようとするならば、手放しい裏切りを以て報いるやうなものとしてか存在してはいないのだという現實に屈服させられるのである。天皇との合一化を求めて齟齬した青年將校達を前にして、むしろ軍首脳が逡巡したのに対し、天皇は、断乎として彼らを逆送と呼びその鎮圧を希望した。天皇はここで、戦後、「人間宣言」に先立つ「人間宣言書」を、しかも最も愚劣で自らの本質を暴露する形で行なつたのである。

この後の日本は、独占資本の要請に照応した社会ファシズムに、形骸化した天皇信仰の衣を着せる形で、太平洋戦争へと流れ込んでいくのである。そこでは全ての思想は死んでおり、もつともらしい理念が、急速に進行する事実の後を追うように浮んで又消えるのである。

は、それがいかにか反國家を標榜しようとも決して國家を超えることは出来ないと思われる。

ともあれ、天皇が政治的變革にも不測、その存在を保ち続けたのは、それが人々の自然的な契機（性の位相）を絶えず組み込んできたためであらう。「万世一系」とは性的存在としての人間の無限性の露わな表現である。

マルクスの言葉を借りれば「君主の世襲性は君主の概念から出てくる。君主は特別に類全体から、すべての他の人、ひとり、区別された人だとされる。では、ほかの人の他のすべての人からの齟齬の固定した区別点は何なのか？ 体である。体の最高の機能は性行為である。それゆゑ國王の最高の憲法的行為は彼の性行為である。」マルクスはこの言葉を皮肉を込めて語つていふように見える。しかしこの国では問題はもっと深刻である。何故なら、天皇は性的自立性を楯としてあらゆる時代を政治的變革にも不測存在し続けてきたし、人々はまた、戦戦しう

紀伊水道に浮ぶ無人島の海岸で、昭和三十四年の十一月と三十九年の八月の二回にわたって計四体の埋葬遺構を発掘調査した。

紀勢線の下津駅と初島駅の中間地点で、車窓の西側（天王寺駅から乗車すれば右側）をみると東亜燃料株式会社の巨大な石油工場がある。その建物群を越えて遠望すると海中に「地ノ島」という比較的大きな島が見える。このあたり列車は丘陵の中腹の高いところを通過するから少し注意をすれば、誰の目にもとまる。昭和三十四年の夏、数人の人たちが海水浴のためにこの無人島に渡った。そして少し入江のようになった東北側の砂浜

で砂遊びをしていたところ突然人骨が現われた。このことが地元の有田警察署に届けられ、急発掘調査が行われた結果、これはほごも古代の遺跡であつて文化財として取扱うのが適当であるといふことになり、初島町教育委員会と話し合いがもたれた。それから三ヶ月ほどたつて当時町史編纂委員長であつた宮崎門彦博士から本学教授末永雅雄先生を通じて私に現地調査し、発掘計画を立案するよう指示された。早速履勘し人骨出土付近を調べてみたところ、縄文土器や製塩遺跡とみられる遺構もあつた。そこでこれらの遺跡調査もよくめて、埋葬遺構を調査することとし、文化財保護法に規定された手続をとると共に調査団を編成し、十一月三日より三日間発掘調査を実施した。その後三十九年になつて、同じ海岸の別の地点で護岸工事が行われ、その際にも二所に埋葬遺構らしきものがあるとの連絡をうけ、再び現地に赴いた。そして八月二十七日より五日間第二調査を実施し、箱式棺に納められた二基の埋葬遺骸を発掘調査した。

(一)



埋葬遺構の発掘調査

古代史の謎に挑むⅥ

綱干善教

俯つて、そのなかに入れている貝殻を調べたら、たところ海濱に寄生する貝の種類の異なるのがあるのが教示を得た。そうすれば遺骸を納めるときに、その下に海藻を敷きつめたのであろう。海岸に埋葬される場合、当然そのような方法が行われたと考へられる。しかし普通の場合であれば骨だけを取り上げて、それで調査は終つたときれ易いが、持ち帰つた砂の中小さなそのような貝殻が含まれていることに気がつきにくい。調査は慎重に、かつ細心の注意を払わなければならないことを感じた。と共に他の分野の専門研究を尊重しなければならぬことを知らされた。

(二) 古墳を発掘調査する、墓跡を調べる。

そうしたとき人骨が出土するは当然である。私たちの研究の領域にはさうした機会が多い。この場合大切なことは「骨が出た」とか「人骨が現われる」とか一種の好奇心が先き走つてしまふことがある。一般の人たちも、そこに焦点が当てられる場合が多い。またこの人たちは私とは何の血縁ももない人かも知れない。しかしそこには故人として尊敬の念

最初に調査した第一号人骨は、殆んど破壊されていた儘かに埋葬遺構のあつたことのみ確認したにすぎなかつた。続いて調査した第二号人骨はほぼ完全な状態で出土した。これは壮年男性であつた。第二次調査で検出した遺構は、箱式棺（板石を長方形に組んで蓋をりた構造）であつたので、二基共に入骨は完全な状態で出土した。これを第三号及び第四号人骨とした。被葬者は第三号人骨は熟年女性、第四号人骨は壮年女性であつた。

この調査で特に注目であつたのは第四号人骨で、腹部を下に、背を上全く逆な姿勢で埋められていた。このような例は極めて特殊なものである。また箱式棺のなかに、成虫の「かたつむり」の貝殻がたぐささん納められていた。これはどのような意味をもつかはつきりしない。動物学者の意見によると、狭い棺のなかでこれは繁殖するとは考えられないといふ。そうすれば遺骸を納めた時に、棺内に入れられたのであろうか。若しそうだとすると一体何のためにそのようなことが行われたか。この解答は私にはわからない。謎である。

またこれらの棺の中の砂の一部を持ち

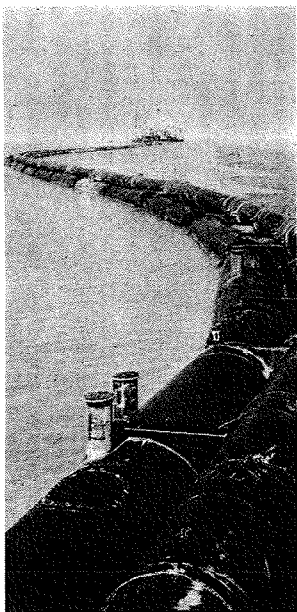
をもって事にあたるべきである。如何に学問のためとはいへ、そしてその人骨の埋葬状態が、施設が学術資料として価値が高いものであつたとしても無難な取扱いべきものではなく、死者の靈を弔う敬意も必要である。

よく展覧会などで出土した人骨をそのまま陳列してあるのを見かける。昨年もあるデパートでの展覧会にたくまの人骨そのままを棚に展示してあるのを見た。あたかも三条河原の処刑場のように。私はそれはさけるべきであらうと思う。横型でもよい。写真でもよいと思ふ。もし研究その他のため実物の人骨を必要とする人があるならば、それは何時でも呈示してよい。しかし好奇心で大衆の目前に晒すべきでない。

私は仏の縁に成なる一人の人間として、特にそのような気持ちをもつのかも知れないが。

私は考古学徒として、私採も人骨を掘らなければならない。それはその時にのぞんで、研究資料としては物とつて、人間としては故人としての立場を明確に區別する気持ちを持ち続けたい。

(文学部助教)



カール・コルシュ

革命スペインの経済と政治

(ハルヴィング・マルクシズムⅤ誌、第四巻第三号、一九三八年)

カタルニアをはじめとするスペイン各地の革命的プロレタリアートによる建設の仕事、リアリステイクに論じようとするならば、かれらの成果を、抽象的な理想にてして評価するわけにもゆか

ないし、まったく別の諸条件のもとにあった革命運動が達成したこととくらべて評価するわけにもゆかない。集産化(Kollektivierung)の実際の成果がもつとすすんだかたちで見られる方々

ロニアの諸産業においてすら、オーソドクスな社会主義・共産主義理論のえがく理想像にくらべて、いちじるしく遅れていることは、疑いない。それを、バクーニンの後の革命的サンディカリスト・アナキスト労働者の数世代のいたたく高邁な夢にひきくらべてみれば、この懸隔はいつそう大くなるだろう。

スペイン革命の最新段階の旨為と、ロシアの一九一七年十月以降の事業とのあいだにも、歴史的な類似性は存在していない。スペイン革命の最新段階は、フランスにおよびかれを援助するフランス、

ナチ、ブルジョワ民主派の侵攻にたいする、革命的労働者の即座の反撃をもって始まり、いま急速にその終結にむかっているのだが、ロシアの一九一七年十月以降のできごととは、いわゆる八戦時共産主義Ⅴであり、これに引き続いたNBPだった。(スペインの)一九三一年の君主制打倒以後の革命運動の経過のなかでは

あるいは、労働者の革命の前衛の名において語らざるを得ない組織の手中にあって語らざるを得ない。このことは、サンディカリストの専横であるカタルニアについてもいえる。そこでは一九三六年七月の直後一時に政府は存在しなかったが、他方、労働組合によって行使される権力のほうも、できてで形がととのわず、独自の政治的形態をとることがなかった。ここに生じた状況は八二重支配Ⅴと呼べるのではなく、むしろ、国家権力全般の一時的剥落だった。この剥落の原因は、第一に、国家の(経済的)内実——これは労働者の管理下に移行した——と国家の(政治的)外殻との分離であり、

第二に、フランスと共和派との間の、マドリッドとバルセロナとの間の国内対立であり、最後に、資本主義国家の官僚的、軍事的メカニズムの主要な機能をなすもの、すなわち労働者の抑圧が、武装したプロレタリアートにたいしては有効になりえない、という決定的な事実であった。

最近七年間の(スペイン)革命の展開のなかで、労働者階級が一体となつて行動すれば国家権力を奪取できたはずなのに、理論的なためらいから、あるいはこれらの革命的姿勢そのものの弱さから、行動を見送つたような八客観情勢Ⅴが、いくどか——一九三四年十月とか、一九三六年七月とか、一九三七年五月とか——あったかどうか、ということについて争うのは無益だろう。一九三六年七月にシエラ・レオンで政府の武器庫を襲つて、敗退したファシスト暴動者から奪われていた軍需品で武装したのだが、これは(ロシアの)一九一七年七月の行

動と同じ意味のものでしかなかった。一九一七年七月、ベテルスブルクの革命的労働者、兵士は、八金権力ソヴェトへ「および」八資本主義的側面を倒せⅤというボルシェヴィキのスロガンをあげてデモし、逡巡していたボルシェヴィキ党中央委員会に、八時期早々のⅤ革命行動には加わらないという当初の決定を取り消すこと、労働者、人民にむかつて八平穏なⅤ武装デモを呼びかけることを、余儀なくさせたのである。

二〇年後のこんにち、動揺と内部対立のめだつスペインのアナキストとサンディカリストの、混沌とした不決断にひきくらべて、一九一七年ボルシェヴィキ指導部の革命的決断を讀めるひとびとは、つぎのことを想起してほしい。十月革命の勝利に先だつて三カ月の、一九一七年七月の暗い日々には、レーニンとかれの党もまた、故S・B・クラシン(ボルシェヴィキ党員、のちにソヴェト政権内の頭脳に就いたが、その後ある工場の管理者となつた)が以下のよう

きなければ、勝利に転化することもできなかったのだ。

▲主として兵士および一群の遊び人から成るいわゆる大衆が、二日間、無目的に街頭を徘徊して、しばしば恐怖感から射ち合いをし、ちよつとおどろかされば逃げ走った。見通しなど、まるでなかった。▽(引用は Bunyan / Fisher

《The Bolshevik Revolution 1917/18》一九三四より、以下同)

▲つと後年、ボルシェヴィズムの勝利が栄光でつづめられたとき——しかし頼りな人自己批判▽は支配階級の上層においてはまだ可能だったとき——にすら、人民委員ルナチャルスキーは、つぎのように七月事件を回想している。

▲認めざるをえないことだが、党は、困難から脱け出す方途を知らなかった。党はソエによつて、メンシェヴィキと社会革命党にたいし、かれらができなかったものもないことを要求せざるをえなかった。そして両党が——期待されたとおり——(ブルジョア聞取ぬきのメンシェヴィキ—社会革命党政権をつくることを)拒否

はなからう。

だからといって、カトローニア労働者の革命行動が、かれらの伝統的な政治的禁欲によつて阻まれたことを、否定するつもりはない。かれらが無条件に支配権を握っていたと見え、かれら自身もそう思っていたときの、かれらのもつともラディカルな経済措置でさえ、ボルシェヴィキ独裁の経済、政治措置がもつていた首尾一貫した目的意識性をもつてはいなかった。ボルシェヴィキの諸措置はその目的意識性によつて、自衛および全ブルジョワ世界に在るかれらの敵をかんかんにさせ、また恐怖させたのである。八交通運輸時代のボルシェヴィキ革命の▲非人道さ▽なるものを外国の評論屋どもがあげつらつたときの不安動揺に比すべきものは、スペイン革命についてのブルジョワ報道のなかには、あまり見あたらない。(ボルシェヴィキ革命の)当時は、かつて革命的マルクス主義者だったことのあるカール・カウツキーでさえが、ボルシェヴィキはその財産収奪措置の頂点を飾るに▲ブルジョワジーの女性

してきたとき、党は、つぎに打つべき手かわらなかつた。党は、街頭デモをフランシに放置し、戦力を結集する時間を敵に奪がせた。そのあいだに味方の戦力を四散し、われわれは手を供いて一時の敗北を耐えた▽

スペインのサンディカリストには革命的指導性が欠けていた。としばしば非難されるが、客観的に革命的な情勢のなかで権力を奪取する能力もなかつた、ということも、ボルシェヴィキ党についても同じようにいえるのだ。そしてこの無能力の直接の結果もまた、一九三四年、三十六年、三十七年のアナルコ・サンディカリズムのばあいと、ボルシェヴィズムのばあいとは同じだった。レーニンにたいして、帰国以後のかれの行動のすべては、わけても七月の武装デモは、ドイツ軍総司令部の秘密のさしげねによるものだが、という中傷が浴びせられた。ボルシェヴィキ党中央は検察をうけ、印刷所は閉鎖され、カメネフ、トロツキーらの多くの指導者は逮捕された。レーニンとジノヴィエフは地下にもぐった。

たちの社会化▽をもつてした、という意見をくりかえしていた。思うに、かれはそれを本気で信じていたのである)あのかの度ははすれにくらべると、集産化についての(ロンドンの)《タイムズ》紙の通信員の報道のなかには、少々ユートピアも見られるし、スペイン民衆の▲個人主義▽へのうれしげな信頼感が見てられる。

▲中央政府(の力)が居いて、バルセロナはよみがえった。この大都市はそれまで、集産化の重荷の下でまひりかけていたのである。各個人が自分の主人であろうとするスペインで、幸福を集産化するわけにはゆかない。あるホテル所有者は、自分のホテルでボーイとして働くことには耐えられず、別のホテルでボーイになつた。舞台では主役だが給与では端役なみのある有名俳優は、舞台装飾係に降壇の交換を申し入れ、稼ぎ高は同じなんだから、おれに大道具を建てさせろ、そしてきみは舞台へ出て演技しろ。と、いったと伝えられている。映画館の観衆は、音楽大学の教授が楽師席で第二

二カ月近くあと、コルネーロフ將軍の反革命暴動にたいしてケレンスキーの人民戦線政府を支持することにより、みずから革命的自立性を危うくするところないやう、同志たちにもわかつてレーニンが警告したときも、かれはまだ地下にあらた。

だから、スペインの労働者や、かれらの革命的サンディカリストおよびアナルコ指導部にたいして、かれらはロシアのボルシェヴィキのような真の革命党ならば有効に利用したであらうような諸条件のもとで、何もせずいた、と非難するのはフェアではない。同じ政策を、一九一七年七月のボルシェヴィキについては▲慎重でリアリステイックな革命的政策▽と呼び、それが完全に類似した状況下でスペインのサンディカリストによつてくりかえされると▲革命的予見と決断との欠如▽と非難する、といったことはできない。もしそうするなら、二〇〇年まえのパスカルの断言——「ヒレネー山脈のこちらで真実なことは、あちらでは虚偽である▽」をも、承認するほか

ヴァイオリンをひいているのを発見する、というたのしみを——むろん、悲しいたのしみを——もつたものだった。▽

一 九月後に書かれた、ずいと思意のある《タイムズ》の「タイムズ」通信員のバルセロナからの報道さえも、集産化された企業における労働者の生活の、魅力的に見える叙述をいささかはやみんではたき明けてぬ説者たちを宥めるために、つぎのように附け加えていた。集産化——繊維産業を例としてえがかれている——にはむろん限界がある。というのは、共和派は労働者管理より国家統制を好んでいりし、スペインにおける外国権益の保護にとめていりるから、一九三八年三月八日号の《イヴニング・スタンダード》紙も、同じ語調で、スペインの▲実力者▽(いまでは解任された共和国防衛相フリエト)は八月までが好きで二重あごの、好感のもてるふよふよ新聞社でであり、フランコ運動の金主フアン・マルチの知人で、かれの▲価値▽はフランコも認めている。

と書いている。

【C.N.T.】と【E.N.T.】はさまざまな苦い経験を重ねて、とうとう、政治への不介入をいうかれらの伝統的戦略を抛棄することを余儀なくされたが、このことは、あらゆる革命家——絶望的にセクト的になくらかのアーナキスト・グループを除いて——の眼に、プロレタリア階級闘争のあらゆる段階、なかんずく革命的段階における、経済行動と政治行動との抜きがたい関連性を、明らかにした。これが、スペイン革命——第一次世界大戦後の革命の故の極端——のもっとも重要な教訓である。この教訓は、スペイン労働者の階級運動と、最近七十五年間のヨーロッパおよび【C.N.P.】の政治的階級闘争との間の、基本的相違を考慮にいれるとき、とりわけ重要になる。

この教訓の妥当性は、C.N.T. が現時点では相対的に穏和な要求を提起しているからといって、弱められるものではない。たしかに、【A.】社会主義共和国の人民大衆の志向とも一致すれば、民主的・自治連合的でもある【V.】よりな【A.】新たな立憲

わち、ケレンスキに代えて、ソヴェトに責任を負う社会革命党【M.】メンシェヴィキ政権を成立させる可能性がある。ホルシェヴィキはこの政府に参加はしないが、しかし【A.】労働者、貧農への権力の即時移行を要求すること、ならびに権力を奪取のために革命に訴えることを、断念する【V.】であろう、と、レーニンは、一九一七年九月にこの戦術を【A.】妥協について【V.】という有名な論文で提案したとき、もちろんこんどちのスターリンとは違って、あるいはワルトラ資本主義のオランダで國家を否認しているアーナキストたちとは違って、無誤謬の革命的な正しさを自慢したりはしなかった。ところで、この現実の歴史的一幕から見れば、レーニンのけちな末流どもも、革命的カタロニアのサンディカリスト労働者の営為を批判する権利はない。それに、ロシア國家がスペイン労働者に行なっているという【A.】援助【V.】の二義性は、周知のことではないか。（原注：一九三六年十二月十七日の【A.】「ブラウダ」の一文は、【A.】ボルシェヴ

的時期【V.】を提起することは、人民戦線政府が従来のブルジョワ政策を継続するばかりいにも、なんら際時とはなさないし、【A.】社会民主主義の【C.N.T.】とサンディカリスト系の【C.N.P.】が同数の代表を送る、政党和労働組合とを基礎とする国民経済委員会【V.】を創出したところで、政府の従来のブルジョワ改良主義的傾向が、プロレタリア革命的傾向に変わるわけでもあるまい。この点にも、サンディカリストのこんにちの戦術と、コルニエフ暴動前後のボルシェヴィキの態度との類似性が、あらためてはつきりと見てとれる。

もしこの類比が正しくて、十月革命を遂行した党のようにだんぜん政治的でもあれば政治的経験をつんでいった革命政党でさえが、最後の完成に至るには、既往とはまるで違った歴史的直観に俟たざるをえない。といえるのであれば、これまで非政治的で政治的経験をもたなかったプロレタリア革命家のグループにむかって、こんにちのスペインの、超えな未発達な諸条件のもとで、超人的、超歴史的な業績をどうして期待できようか。スペイン

イキ化された【V.】スペインの【A.】友人【V.】たるスターリンストたちの意図を、つぎのように公然と表明している。【A.】カタロニアからのトロツキストおよびアナルコ・サンディカリスト分子の清掃は、すでに始まっている。それはロシアで同じように精力的に遂行されるだろう。【V.】

深刻な影が、スペインで英雄的な努力と犠牲のもとでなされている建設の仕事の上に、おちている。建設の仕事がなされたのは、【A.】集産化【V.】というアナルコ・サンディカリズムの綱領が【A.】固有な【V.】いし【A.】國家の干渉【V.】という社会民主主義ないし共産党の要求よりも優勢だったすべての場所においてであるが、その仕事はすべて準備なものにすぎなかった。仕事の展開ないし存続は、革命運動の進展なしにはありえなかつた。とりわけ、フランスの反革命およびその強力なファシスト、半ファシスト同盟者の決定的敗北が、その前哨だった。現在、評判の高かった新共和国軍の敗北によって、ネグリ政府の内的弱点が明瞭となり、人民政府内部のファシスト、資本主義勢力の代

ンでは、イベリア半島のコルニエフによる反革命は、崩壊するどころか、勝ち誇って進出しており、いまやスペインの工業センターを、反ファシスト、反資本主義勢力の最後のとりでを、プロレタリア地域たるバルセロナを攻撃している。

冷静な歴史研究の見地からすれば、一九一七年のボルシェヴィキの指導が、あらゆる革命行動につきものの人間の動揺や、予測の誤りを、けつて免れていなかったことについては、十分な証拠がある。一九一七年八月・九月のコルニエフ事件のあいだにボルシェヴィキがつつみごととな政治戦略——ボルシェヴィキはレーニンのきわめて秘密な指示にたがいない、【A.】コルニエフにたいしてはケレンスキの部隊に劣らず戦う【V.】につとめると同時に、ケレンスキを支持せず、【A.】逆にかれの弱点を露露【V.】た——が勝利を収めたのちにすら、なおレーニンは、つぎのような想定から出発していた。臨時政府の弱さは、コルニエフの敗北後には誰の眼にも明らかであり、革命の平和的進展を可能にしている。すな

亦者たはインダレシオ・プリエトが恥しきも外聞もなしに隠され、政府のいっその【A.】左翼面【V.】が不可避的となつていながら、もしこのさい革命的プロレタリア勢力が、遅ればせきながらバルセロナで勝利をたたきいとなるならば、真にプロレタリア的な——すなわち、労働者とその組合自身によって開始され統行される——集産化という大きな実験の、直接に歴史的でもあれば実践的でもある意義は、このほか大きくないだろう。

こういふ望ましい転回がないば、カタロニアの集産化を叙述することは——その叙述は、C.N.T. と E.N.T. によって公刊された小著《Collectivisations》 Editions CNT, FAI 一九三三）が偏見なしに、印象的に行なつており、この論文の統稿でのスペインの経験の分析、批判は、それに依拠してなされる——、マルクス、エンゲルス、レーニンの著作家の、一八七一年のパリ労働者の革命的コミューンの経済的実験について報告すること以上の、功績をもつ仕事ではありえない。そのばあいには、ことが

らは歴史上の過去のひととまであって、あわてふためいた地主・資本家の雇ったムソリーニの徒党によって壊滅させられた一九二〇年の革命的イタリヤ労働者の実験や、一九一八―二三年にドイツとハンガリーの労働者の前衛が企て、同じく実験を結ばなかった実など、同列のことになってしまふ。「(そういうえば)ロシアの労働者が、一九一八―二十年の真に共産主義的な実験の期間にあげた成果より汎流るもあればより広く知られてもいる成果にしても、のちのソヴェト・ロシアにおけるいわゆる「社会主義建設」になつたのは、実践的な意味はやがてホルシェヴィキによつて、戦争と内戦という窮境のために指導部がやむなくしよこんた、もつぱら消極的な形態のコミユニズムとして、非難されたのである。

△戦時階級主義Vとよばれる実験は、こうして、歴史上の過去の、ひとつの忘れられたエピソードとなつてしまつた。しかしその実験は、NEPやネオNEPとくらべても、さらにレーニン以後のスタ

ーリン主義ヒュクラシーのさまざまなグループが遂行した、もはやプロレタリア的でも社会主義的でもない各種各様の政策のどれとくらべても、ずっと積極的な、コミユニズムをめざした運動だった。「ところが、そういう経過をたどつた」ロシアがこんにち、八二国社会主義Vの建設によつて、インターナショナルな労働者階級の先頭に立っている、と自称している。

ホルシェヴィキの経済政策のそういう転換に先だつて、すでにレーニンは一九一九年十二月四日―権力奪取の二年後―、農業コミューンならびに協同組合の第一回総会の席上で、それまでのコミユニズム実現をめざした闘争の成果を、つぎのように概括していた。「コミユニズムは社会主義の最高段階であり、ひとつが、総体の幸福のための労働の必要性を理解しているから労働する、というぐあいになる段階である。われわれには、いまの時点で社会主義体制をつくれれば、それは、よく分つている。事情が許せば、これは、われわれの子あるいは孫

の時代につくられるだろう。V
△革命の歴史に寄与することVが、スペイン革命についての前記の小著のモットーである。このモットーは、その小著の編者たちにとつても、またわれわれにとつても―われわれというのは、あらゆる形態の旧V社会主義、共産主義、アナキズム労働運動が沈没しつつあり、危機に揺さぶられている暗鬱な世界のなかにいる、革命的労働者のことだが――、つぎのことを意味している。「すなわち、歴史上の成功と失敗とからわれわれは、未来のための教訓を引きだし、革命的労働者階級の諸目標の実現のための方途と手段を見いださなくてはならない。ということ。」

注①※ CNT Confederation Nacional

Trabajo 1911. ナタルコ・サン

ディカリストの組合組織

※ FAI CNT の秘密組織一九二五

※ UGT Union General de Tra

bañeros 一八九九スペイン社

会党が提案し、創立した労働組

合組織

カール・コルシュ

スペインでの集産化

(ハリウィング・マルクシズム誌、第四巻第六号、一九三九)

前回の論文でわたしは、一九三六年七月一日日に始まったスペイン革命の新段階の特殊な意義をインターナショナルな労働者階級に理解させずには、ひとつの重大な誤解にたいして、反論をこころみだ。スペインにかんする文獻はおびただしいが、わたしの見るところでは、現にスペインで行なわれている革命闘争の現実の内容をなしているものについての十全の報告は、こんにちにはなされて、まだ存在していない。そういう情報は、いわゆる進歩的文筆家からは、もちろん期待できない。かれらにとつては、いまもなお、激化する階級闘争も戦争内戦も、△ファシズムV原理と△デモクラシーV原理のあいだのイデオロギー闘争の表

現にすぎないのである。しかし、精神の闘争といわれているものの現実の内容は、見かけばかりが、客観的な歴史家などに解明できるものではない。この連中は、スペインの現段階の内戦の位相中(人民敵愾忠誠な諸グループの相互間の対立と、より自立しない対立については、いわずもがな)わきへ押しやってしまい、それよりも重大なのは帝國主義の諸権力グループの相互間の位相中である、という。かれらの考えでは後者の闘争こそが、現在の世界的規模での政治の展開の本質的内容をなすものなのだ。こういふブルジョワ歴史家の八観念的、ないし△現実主義的Vな表面性、に、プロレタリア的な説者は、かかすら

ていられない。かれが一貫して依拠すべきものは、スペイン労働者自身によつて公表された、革命スペインにおける集産化の最初の七か月についての、啓発的な報告(訳注:前記《Collectivations》を、さす)を指してはかかない。沈黙の隠謀や歪曲が最近のスペインのできごととの真に革命的な側面をほとんど消し去ろうとしているが、この報告は、こういう沈黙の隠謀や歪曲を打破することをめざしている。

第一次世界大戦後のソヴェト・ロシア、ハンガリア、およびドイツでの社会主義の実験以後、はじめて、ここにえがかれたスペイン労働者の革命闘争が、資本主義生産方式から、共同経済の生産方式への移行は、新しい型を提示している。この移行は、未完に終わったといえ、印象的なまでに多様なかたちで行なわれた。それらの労働者の前進は、自由な共同経済にいたる途中であるいは革命の進出によって外側から、あるいは反ファシスト戦線内政の見かけ上の同盟者によつて内側から、いつしか無に帰せし

められてしまったけれども、だからといって、この革命的経験のもつ意義は減ずるものではない。労働者たちは、公然たる弾圧をうけて、あるいは一も二もとはしばしば規律ある戦争遂行という高度の必要の名目のために、闘争の成果を手離すことを余儀なくされた。最初の時点で革命的成果の大部分は、反ファシズムの共同闘争という主目標のための無効に終わった努力のなかで、成果を達成したひとびと自身の手で、自発的に犠牲にされた。

それにもかかわらず、社会・経済戦線でのスペイン労働者の努力は、まったくむだだったわけではない。一八七一年のパリ・コミューンや、一時代あとのハンガリアやバイエルンのソヴェト革命が暴力的に壊滅させられたことも、そしてロシアのソヴェト社会主義の本来的革命的内幕がしだいに、めだたずに、自身の手で消去されていくことも、それぞれ偉大な実践、社会主義への移行のための新しい国家形態を創出し実地試験しようとする実験の意味を、打ち消してしま

という編者のあてがいは、この本はあといに限ってほとんど無用である。八むわれはただスペインの労働者に発言させ、かれが自己の自由と幸福を獲得し防衛するために何をしたかを、全世界にむかって語らせたにすぎない。V

この書物は四部に分かれているが、その第一部は八新しい集産的経済の全般の性格を扱うと同時に、Vカタロニア経済Vの概観を付け加えて、スペイン経済全体のなかでのバルセロナのねまをた地位と、これにもとづいてカタロニア工業労働者がスペインの労働者階級の社会闘争のなかで占める決定的な役割りとを、具体的に明らかにしている。

第二部は、集産的労働の方法と結果を、種々の産業部門について個別に述べている。第三部と第四部は、多かれ少かれ貫徹された共同経済の成立および現在の活動を、地域別に、都市と農村とに分けて叙述している。

最近のヨーロッパ史上の数々の人社会化法令Vとは対照的に、一九三六年十月二十四日のカタロニア経済委員会の集産

うものではなかった。同様に、これにちのスペインでの集産化の措置が、最終的には一昧方と敵とによって取り消されるにいたったことも、新しい自由形態の共同経済の生産がここで初めて大規模に実地試験されたことの意味を、減ずるものではない。この運動を研究してその構想や方法、成果や失敗を明らかにし、ひいてはその長所と欠陥を認識することは、したがって、インナショナル・プロレタリアートのうちの階級意識をもつ革命的な部分とそひとびとにこそあの小著は向けられている一にとつて、未来にわたって意味をもつのみならず、スペインでもっとも先進的な地域での産業の集産化を扱ったその書物は、カタロニアの指導的労働者組織（サンディカリスト系の CNT とアナキスト系の FAI）によって權威づけられており、歴史的な資料としても一級品であつて、広汎な理論的意義をもっている。その編者たちが任務としたのは、八できるだけスペインの革命家たち自身に語らせることVだった。その編集は八もっぱら全体像をうか

化指令の全文は、当時工業と運輸業の大部分について事実上すでに完全に実行されていた改革を、あとから合法化したものにすぎない。八労働者の自発的運動によつてつくられた枠をこえるような特別な指導性は、そこにはふくまれていないVがならしく八集産化の任務と限界Vが研究されることもなかったし、実践的なオトリティを欠いた委員会1とえば、一八四八年のフランス二月革命での悪名高い八常設特別委員会V、その歴史的後継者として一九一八/一九年のドイツにできた八社会化委員会VのようなVが、とくにそのために設置されることもなかった。スペインのサンディカリスト・アナキスト労働運動は、この課題については大都市から僻村にいたる各地で多年にわたって絶えず新たに論議してきて、十分な準備をよくわきま

っており、自己の経済目標をよくわきまえておき、この目標を達成するための最初の実践的な歩みについても、同じような状況におかれたヨーロッパの他地域のいわゆる八マルクス主義的V労働運動にくら

ひあがらせるためのいくつもの短いスケッチとならんで、主としてオトリナルな資料を、すなわち所有権奪取の文書や、サンディカ（労働組合）の報告や、決議文や規約などを、また種々の産業部門、種々の地区にかんして革命運動の活動家自身の手記の報告、ブルジョア・インタヴューをVふくんで。じじつ、純粋な資料の集成というこの性格は、たんに外見のものではなく、文体にまで、またそこに表出された態度や思想の総体まで、つらぬかれていた。だからこそ出来あがったものは、最高度人間的であると同時に、即物性の要求にもこたえたドキュメントとなった。都市と農村の素材なひとびとの報告は、無味乾燥でもなければ退屈でもなく、美文、いわばスペイン革命の両を、八プロレタリアートの行動を、ありのままにV再現しており、狭い意味での原資料の部分と相俟つて、書物の総体に紛うかたない追真性を附与している。八この書物には讚美も中傷も、誇張も押しつけもないV

べてすつとリアリスティックなイメージを、総じて所有していたのである。スペイン労働運動は、わけてもこういう第一段階では自己のイニシアティブによつて創出された新しい経済的・社会的生活関係を、政治的・法的的に保障することに、あまり気をつかわなかった。しかし、あとになってからはほとんど取り返しがつかなかったこの初期の誤謬は、状況からすれば避けがたいものでもあった。当時は、自由を求めつつ労働運動の活動家自身によつて形成された八反ファシスト民兵委員会Vがあるだけで、カタロニアの全域にはいかなる上級官庁も、議会もなかったのだから、取用の対象となるような大資本の所有者たちもいなかった。大企業の一部は外国資本に属していたし、その管理人たちは、土着の大地主たちと同様、叛逆した将軍どもの多かれ少かれ公然たる味方であった。じぶんたちが内戦に巻きずりこんだ祖国から、ファン・マルチやフランソワ・カンボのようになまえて逐電してしまつたか、あるいはバルセロナでのフランコ派の暴動

の失敗のあと、逃げだしてしまつていた。だから、この著作にえがかれたカタロニア労働者の対資本攻勢は、この段階では、眼に見えぬ敵を相手にしての闘争に似ていた。鉄道、市内交通機関、バルセロナ港の船会社の乗取られたら、タラサやサパデルの繊維工場の持主たちも影も形もなかった。パルセロナ市の取引のときのように、がらんとした大独占企業の建物のなかにまだ誰かがいた、などというものは例外だつた。労働者の手でおんどうすまでもなかつた。

こうしてカタロニアのプロレタリアートは、もとの持主が見棄てた工場や事務室を好きなように使うことができた。労働者がひきつりだしたあの八集産された企業Vは、八資本主義経済内の株式会社と同一ようになつた。活動しつづけた。八労働者の全体会議が「評議会議」を選出して、これが、企業活動の全段階を、生産、管理・技術などを代表するVを、生産、管理・技術などの持続の連絡は、同じ評議会議に労働組合中央機関の代表が出席することによって確保される

農村労働者の全体会議の決議や、一九三六〇/三七年農業年度のために種々の地区や自治体で提呈された規定や組織計画に、はつきりと見えて来る。

書物の第二部は、運輸、繊維、食品などの重要産業部門における集産化の実施を、ことまかに厳密にえがいているが、これについては主要な点の少々に触れておこなう。どの文章からも見えて来るのは、当該産業部門について作られた新たな社会的組織だけでなく、スペイン内戦の脅威下での自由な労働運動の大きな経済的、社会的イニシアチヴが労働者自身のために、さらにそれ以上に生産の維持と拡大のために、獲得してきた大きな成果の一端でもある。非人間的な労働条件の廃止、賃金の引き上げ、労働時間の短縮、労働者とホワイトカラー、熟練労働者と未熟練労働者、男と女成人と青年のあいだの賃金較差を調整しようとする種々のかたの新しい試み、均給と家族給、といったことならんで、すべての産業部門で生産の拡大と改善の問題が週を追って大きく取りあ

し、八業務の執行そのものは、重要企業のばあいは当該産業（部門）の総評議会議の同意を得て選ばれた管理者にこれはしばしば、その社会化された企業の従来所有者だつたり、経営者だつたり、管理者だつたりする一依然としてまかされたままである。V

しかし、外見はそうであっても、工業・商業経営の従来生産方式を八集産化が本質的には少し変革しなかつた、というわけではない。この点に示されているのは、むしろ、従来経済的、政治的権力者の抵抗が一時的に完全に欠落していて「幸運にも」このばあいはそうだつた。その結果、武装労働者が、純軍事的な闘争問題を解決するやいなや生産の継続、改革に移行できるとき、この著作のいたるところで指摘されているような転換（「すなわち」生産・管理・給与などにかかわる抜本的な転換が、形骸上組織上の大きな変化もなく、相対的にこれにたやすく遂行されるか、ということにはかならない。そして、これに先行する期間に労働者たちは、一見しては海外

げられてゆくことが、それらの文章から読みとれる。

まったく新しい産業部門、たとえば革命そのものが創出した光学工業が建設されてゆく。外国からの原料（輸入）が不足したり、住民の直接の扶養のために不可欠でなかつたりする生産分野は、日を追って緊要となつた軍需品生産へ、しだいに切り替えられてゆく。このためにも、また戦災流亡者やフランコの占領地域から大量に流入してくる亡命者を養つたために、かつての法外な貧困からやっと解放されたばかりの都市、農村の極貧労働者層までが、手に入れたばかりの獲得物である自由時間や生活水準を、自発的にふたたび抛棄してゆく、そういうことが語られていく。

けれども、こういう断念や自己否定という消極的業績——最近二年間のスペイン労働者の巨大な奮為にたいする讃歌は、あまりにもしばしば、こういう消極面に対象を限つてきた——が、われわれにとって重要なものではない。原理的な意義をもつものはむしろ、この集産化の初

でハエトリビアンVな夢をえがいて、十分にこの改革の準備をしていたのだつた。

そればかりではない。社会主義のもっとも困難な課題である農業の集産化につき、この労働者たちは独自のリアリスティックな継続を用いて、そこからいさゝかの性急さや、行きすぎや、思い違いを取り除こうとつめていた。一九三〇年六月にマドリッドでひらかれた「三六」大会の農場集産化決議は、それ以後の革命運動の後退と再進出の全面面をつうじて、アナキストとサンディカリストの活動家によつて国内のいたるところに広められ、正確に説明されてきた。それが一九三六年七月/八月にいたつた、農村労働者や小作農の自主行動の実践的な指針となつた。

あらゆる村の農村労働者と小作農は、いま完全に自己のイニシアチヴにまかせられ、いかなる権威にも後見されたり邪魔されたりせず、行動もした。直接の農業生産者たちがその課題をみずから解決していった具体的な形態は、カタロニア

期に労働組合が、スペイン、とくにカタロニアとヴァレンシアの独自の型の労働組合が、はたした顕著な役割りである。この型の労働組合はつい最近まで、イギリスのトレード・ユニオンからも、また中部、東部ヨーロッパの強大なマルクス主義的労働組合からも、いざいざというときには役に立たぬユートピアな形態の労働運動だと、非難されてきた。それは、労働者大衆の自発的活動のみに依拠する。反政党的・反中央集権的のサンディカリズムの労働組合組織であつて、その活動の総体は専従役員によつてではなく、当該産業部門の中核労働者自身によつて遂行される。こういう意識の中核が、革命がはじまると労働者たちによつて——労働組合の枠内で、あるいは枠外で——行動委員会に選出され、そのイニシアチヴをつうじて、また模範的に持続的な相互援助作業をつうじて、新しい革命期の基本的成果を可能にしていったのだ。

スペイン革命のこの歴史的教訓は、革命運動の組織と戦術にとつて、今後とも備

値をもちつづけることだろう。

スペインの革命的プロレタリアートが、圧倒的な困難に面しながらもおどろくほどの成果を挙げえたのは、かれらが、断乎として反国家的な姿勢を堅持して、ともすればおのずから生まれてきた組織上・思想上の障得を、ものともしなかつたせいである。従来のヨーロッパにおけるこの例とも違って、革命的集産化は最初から、私的資本の企業にのみならず、すでに国有化されたり市有化されたりしていた企業も、自明のこととして適用されたが、このことも、かれらの姿勢からすれば当然だった。そういう例としては国営の石油独占や、さまざまな公共企業が挙げられる。

迅速だった八里製薬の一〇〇%の集産化Vの、多少熱くはざる敘述とか、バルセロナで同様に成功した八露天商の社会的調整Vが証拠だっているのは、その分野の存在そのものが革命と矛盾するような分野でさえ、革命が創造的な能力を発揮したのだ。けれども、手仕事とか商業とかが提起するような課題、プロレ

タリア革命の周辺にある困難な課題の解決のために、それが新しいことを語っているわけではほとんどない。その種の課題の解決のためのもっとも価値ある寄与が見いだされるのは、とくにその問題を扱った部分にはなく、問題を間接的に扱っているこの書物のほかの部分においてである。それは、農業生産の社会化という、より重要な問題にかかわるところや、小都市や農村地域の生産や生活の全般を多少とも包含している、この書物の第四部／第五部のこまかな諸報告だ。

この第四部／第五部は理論的性格をもたず、敘述で成り立っているから、この短い書評で、その豊富な内容のごく一部分だけを引用しておく、というのもくあいがわるい。全部で二四篇、一見してはスケッチふうの短章はいずれも、人間社会のすべての中心問題に触れ、国内の全般的発展に規定された種々の地域的条件のもとでの新しい生活の展開の多かれ少なかれ、典型的な、しかしつねに独自の相貌を報告している。最初にある

る。こういう運動が、スペイン内戦のさげすみなかで、またマドリッドやバルセロナやヴァレンシアの住民の英雄的な苦難なかで、残りの全ヨーロッパでは目下どころ取北している労働者階級の、闘争を継続しているのだ。ここに述べられたような態度は、人口の稀薄なラ・マンチャ州にある小さな町メンブリーリヤについての報告において、とくには

つきりしている。その町の労働者は昔から、物質的にも文化的にも、近代的な快適さにはまったく無縁な生活をしてきていた。しかし一九二〇年以降、かれらはサンディカリストの組織をつくって、いまでは、自由なコミニズムの新しい生活形態を、まっさきにとり入れたグループとなっている。この実験にかんするパセティックな確認のことは、書

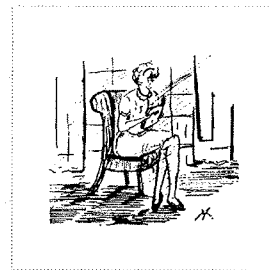
(二)五頁からつづい

大きな断層を、国があろうとなかろうと男があり女がある限り、人は断えず人を再生産するという一点に立てこもって、反抗らしい反抗は何一つ試みることもなく飛び越えてきたのだ。

ところが一方、国家もまたその物理的打撃にも不拘、存在を保ってきた。そして幻想的な共同性としての国家は、その幻想的な故に一つ共同性の歴史を形造る。一方、個別な人間の歴史は血筋であり家系である。天皇はこの個別の歴史を先取りして共同性としての国家に与

え、その故に天皇は国家の血統証明という役割りを担う。

だが今日では天皇の「何者でもない者」という在り方に対応して、国家もまた、制度や機構に過ぎないという新たな神話が流布されているように見える。国家が単に機能としての存在でしかないという神話である。そして、その土台とする所は、まさに世界が「人間と技術」の問題としてしか論ぜられないような現代の状況にあると思われる。



物全体の最後におかれている。ハメンブリーリヤはおそらくスペインでもっとも貧乏な町であるが、しかももっとも公正な町である。V

野村修 七一・三
同じものとして
木村 山本共訳
「レーテ運動と過渡期社会」社会評論社
七五〇円がある。

のは、首都に近い繊維産業センターであるサラサの、発達した工業的諸関係の描写である。この都市の人口四万のうち、一万四千が労働者で、この労働者たちは、一万一千がサンディカリスト系のCNTの、残り組合組織されていた。描写はここから多様な中間段階をへて、もっとも貧困で原始的で、あらゆる工業的、都会文化から隔絶しているが、それでも新しい生活に強く捉えられた小さな村々、カタロニアやアラゴンや、マンチャの小さな村々にまで、及んでゆく、Aそして、われわれが、不断に観察したところではVと、報告のこの箇所編者たちはいっている、八人力の稀薄な小都市や農村ではほうが、多数の人口をつぶす都会よりも、ほんとうに革命的な大きな進歩だ、いずれにせよ重要度の高い進歩が、なされていた。V

素材は貧民にたいすこの称は、マルクス主義運動のもつ唯物論思想とは独特の対照をなすものであって、労働運動のスペインの形態の特徴をなすものであ



世界情勢はめまぐるしくかわつてきている。中国問題、円、ドル、C、あげればきりがないほどの多くの問題がある。

帝國主義者は、自らの政治、政策の破綻を何とかとりつくるおうとしている。あくまでも資本の論理でもって。

××××××××××××××××××

世界における階級闘争は、帝國主義者の養殖人として闘われている。日本における六七年十月八日の闘いをかわきりとした実力闘争に表現されたそれは、ますます幕擧の質を高め、テンポを早めている。

××××××××××××××××××

山積する社会問題に対し、様々な見地、分野からのアプローチがなされている。これらは全て、破壊され、抑圧されつつある自己の生活そのものを、自己のものとして奪還せんがための一つの作業である。それらの闘いはおしせきのものでは決してなく、正に下からの組織である。

この組織の力による闘いは各分野毎の統一戦線の問題としてあらなければならない。

××××××××××××××××××

組合員諸君へ、書評をおとどける。発刊が非常に遅れて申しわけない。

評者、執筆者に対して、早くから原稿をあずかつていながら発刊が遅れたことを誌上をかりておわびする次第であります。

とりわけ野村修氏に対しては、同じ本が訳されて、出版されてしまつて非常に失礼をしました。

また、網子先生に対しても深くおわびする次第である。

今後は、出来る限り早急に発刊するよう、編集者一同努力するつもりであります。

××××××××××××××××××

書評編集委員公募します

連絡先 生協組織部 内線七七六